
炎帝の氷姫

武田 秋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

炎帝の氷姫

【Nコード】

N9659T

【作者名】

武田 秋

【あらすじ】

由緒ある榊神社で巫女をする双子の姉妹、奏音と詩音。ある日突然、一升瓶片手に目の前に現れた母は二人を迎えに来たと言う。そうして有無を言わず母に連れて行かれたその先は、人とは異なるものの住む世界。巫女から姫へとなった姉妹の道は前途多難な道だった。

神の巫女 壺

鬱陶しい梅雨も明け、学生にとって喜ばしい限りの夏休みに突入したのが三日前。

当初の予定では今頃はめいっばいお洒落して友達や恋人と仲良く遊んでいるはずだった。しかし実際はどうだ。今のあたしはというとジャージにＴシャツ、首にはタオルを巻きつけ髪も雑に一つに括っただけ。目の前に広がるのはかわいい雑貨でも服でもなく、梅雨時にのびた草、草、草。

「はぁー……」

これを全部一人でやるのかと思うとため息がこぼれた。

ため息をつくときと幸せが逃げると先人は言うが、ため息とはことが起こった後につくのだから幸せなんて実はその時点で逃がっているのではないか？

第一あたしを不幸に陥れたのは一見人畜無害そうな実の姉であつて、その前にため息をついた覚えはないのだから。そう、すべてはあの姉のせい――

時をさかのぼること約一時間前。

自分の部屋で今話題の現役女子大生アーティストの歌を雑誌を見ながら聞いていると、奴はノックもなしに扉を開け部屋に入ってきた。

「ちよつと奏音、いつも言ってるけどノックくらいしなさいよ。あたしは別にいいけど余所でやったら失礼になるでしょ」

「あ、何か忘れてると思ったたらそれだったのね。ありがとう詩音、おかげで思い出したわ」

そう言つてふふつと笑うのはあたし、さかき榊 詩音しおんの双子の姉で、名前は榊 奏音かのん。

双子だけあつてよく似ていると言われるあたしと奏音。違うところと言えばあたしが若干釣り目気味のくつきり二重で前髪はゴムやピンなんかであげているのに対して、奏音はたれ目気味の奥二重で前髪をぱつんにしているぐらい。

小さいころは服や髪型が同じでよく間違われたりしたつけど、懐かしんでいると奏音の少しだけ非難を含めた声が聞こえてきた。

「詩音ちゃんと聞いている？」

「ごめん聞いてなかった。で、なんて言ったの？」

人の話はちゃんと聞きなさいと腰に手を当てて怒る姿に効果音をつけるとしたら絶対にぶんぶんだなー、なんてどうでもいいことを考えていると奏音が話し始めたので今度はちゃんと聞く。奏音を怒

らすと怖いのだ。

「夏休みだからって毎日寝てばっかしいたらダメでしょ。手が空いてるなら詩音も源藏さんのお仕事手伝ってよ」

「えー」

「えーじゃないの」

「だってそれ着たら暑いんだもん」

“それ”とは今奏音が着ている白衣に緋袴——俗にいう巫女服、巫女装束だ。

あたしたち姉妹はちよつとした家庭の事情で、叔父である榊^{さかき}源^{げん}藏^{ぞう}さんにお世話になっている。

ではなぜそこで巫女さんが出てくるのかだが、それはすごく簡単な話だ。源藏さんは由緒あるらしい榊神社の現神主。そしてあたしたち姉妹はお世話になっている源藏さんの助けに少しでもなるならと、高校に入ってすぐ巫女さんになった。まあその際にかなり色々あったんだよな……真咲さんは元気にしてるだろうか。

ちなみに奏音はあの物腰柔らかい感じと癒し系オーラから、榊社の看板娘、客寄せパンダよろしく神社への参拝客を着々と増やしているし、雑誌やテレビで美人過ぎる巫女さんとして取り上げられたこともある。そのせいでたまに変な輩も来るのだが、その辺は先輩のお姉さま方が綺麗に捌いてくれている。

だいぶ話がそれだが、巫女さんの格好という物は冬はカイロを複数常備しなければならぬほど寒く、夏は薄手の物に変わるとはいえ暑いのだ。それに最近はやよつと着るのが恥ずかしかったりする。

「だったら着なくてもいいから。千年桜の前に来てね」

「あ、ちょっと待つ……………」

昔からマイペースで人の話を聞かない姉は「早く来てね」と一言残し扉を閉めた。

残されたあたしは行き場を失った中途半端にあげられている手を力なく膝の上に落として、よっこいしょと重い腰を上げるのだった。

そうして任されたのが榊神社のシンボルの存在、樹齡千年を越えるらしいその名も千年桜（そのまんま）の周辺の草抜き。回想しているうちにもすっかり手を動かしていたのだが、まだ全体の三分の一ほどこしか終わっていない。

憎き梅雨のおかげで青々と茂った雑草はしつかり根を張っているのだろっ、中々抜けずに苛々が募るばかり。いつそのこと除草剤でもばらまいてやろっかと本気で思案していると視界の隅に黒いものが映った。

なんだろうと視線を向けるがそこにはこれといったものは何もない。

「気のせい……かな？」

それにしてはなんだか人のようなものが木の枝に立っているように見えたんだけどなと、社務所の方へ目を向けると参拝客らしい若い恋人だか夫婦だか何やら話している奏音の姿があった。

しばらくじっと見ていると女性の方がお腹に手を当てたから彼女たちがここへ来た目的を理解した。

榊神社は安産の神様で有名。きつとあの人たちも安産祈願とお守りを求めてどこからやってきたのだろう。

ここからではよく見えないが、あの人たちの顔は今満面の笑顔なんだろうなーと、顔も名前も知らない人たちの幸せとこれから生まれてくる小さな命が健康で元気な子であればいいなと思いながら作業を再開する。

「がんばりますか！」

不思議なことにさっきまでの苛々はどこかに綺麗さっぱり消えていて、心なしかさっきよりもやる気が出た気さえした。

全部終わったのは結局夕方になってからで、シャワーを浴びて汗を流したあたしは奏音と二人で少し早い晩御飯（奏音はこれぞまさ

に夕飯ねと言っていた)を食べていた。普段は一緒に食べる源藏さんは今日はやることがあるらしく今はいない。

ご飯を食べながら昼間見た二人の事を聞いてみた。実は一つだけ気になっていたことがあったのだ。

「ふふ、戌の日のことでしょ？」

どうやら奏音にはわかっていたみたいで、あの大和撫子スマイル(お上品に口元を隠し小さく笑う)を浮かべている。

通常安産祈願とは妊娠五か月目に入った最初の戌の日に行く。しかし戌の日は明日。遠めでもこれから生まれてくる我が子を愛おしそうにしていたのがわかるあの二人がそれを外すとは思えなかった。

「あのご夫婦はね、明日安産祈願をしてくれるように事前に頼みに来たのよ」

「そうだったんだ。今時みんな電話で済ますのに珍しい」

決して電話で話すのが悪いと思ってるわけではない。むしろこちらとしては事前に連絡をしてくれた方がありがたいし、わざわざ出向いて転んだりなんかしたらそれこそ大変だと思う。だからただ純粹に驚いていた。

それについては奏音も同じらしく、「本当ね」と頷いていた。

「二人はこう言ってたの、自分たちを選んでくれた子供の為ならど

んな苦勞も惜しまないって」

テレビのニュースや特番で虐待や育児放棄が多く取り上げられる中、そうやって子供のことを一心に考える親もいるのだと、荒んだ心に一筋の光が照らされる。願わくばあの家族にいつまでも尽きることのない幸せがおとずれますように……

神の巫女 貳

「づがれだー」

「わたしも……」

奏音と二人して服もそのまま、倒れこむように居間に横たわる。
今日は戌の日という事もあって朝から妊婦さんも多く、雑誌を見たり若い参拝客が夏休みを利用して多く来ていた。

もちろん巫女装束は暑いから嫌だなんてわがママを言えるわけもなく、しつかり着込んで源藏さんの手伝いやら、受付やら写真撮影やら（なんでだ）と朝からろくな休憩をとる暇もなく動き回っていたのだ。今は指一本動かすのすら億劫だ。

しばらく奏音と二人で本日の忙しさと昨日来た夫婦の事について話しをしていると、源藏さんが居間に入ってきた。いつもなら帰ってくるなり服を着替えるのに今日は珍しくそのままだ。

「源藏さんが着替えないなんて珍しいね」

ただ思ったことをそのまま口にしたあたしに源藏さんは難しい顔をする。

あたし何か悪いこと言っただろうか。不安になって壁にもたれるようにして座っている奏音を見ると目があつた。双子だからというわけではないが、それだけで奏音もいつもと違う源藏さんに戸惑っていることがわかる。

「あの――」

「二人とも大事な話がある」

奏音はきつと、「どうかしたんですか」と言いたかったに違いなし。それを遮るようにした源藏さんは「本殿に来なさい」と言つて踵を返した。

「本殿つて……」

源藏さんがいなくなった居間で呟かれた奏音の言葉が耳に入る。

いつもは周りを癒す奏音の垂れ目も今は大きく開かれていて、その瞳には驚きと少しばかりの不安が浮かぶ。それほど源藏さんの言つた“本殿”という言葉は大きな意味があるのだ。

本殿とは一般的に神社の奥にある建物で、ご神体が安置される場所の事を言う。普段参拝に訪れた人々が目にするのは拝殿と言われる礼拝用の建物なのだ。神社にもよるが拝殿では祈祷も行っていたりする。ちなみにうちもこのタイプだ。

で、なぜ本殿が重要なのかという話だが、簡単に言うとうちの神社の本殿はどんな理由があるかと神主以外立ち入り禁止。その理由は誰にも知らされておらず、小さい頃からそう言われて育ってきたあたしたちにはそれが当たり前で、死ぬまで一生入ることはないと思つていた。

それなのにいきなり本殿に來いなんて言われれば誰だつて驚いて不安にもなる。

「大丈夫よ。ご神体なんかめったに見れるもんじゃないんだし、この際だから源藏さんに素敵な人が現れるようお願い事でもしちゃうか」

「それもいいかもしれないね」

軽口をたたけば奏音はきよとした後に微笑んだ。

少し天然入っている姉はやはりこうでなくては。ただでさえいつも頼りっぱなしなんだ、あたしがバカやって奏音が笑えるならあたしは一生バカでいる。奏音の不安そうな顔や涙はもう二度と見たくないんだ。

一応ご神体を祀ってあるわけだから本殿へは巫女装束で来た。

すでに中にいるであろう源藏さんをあまり待たせては悪いと奏音を先頭に中へ入る。さっきまで不安がっていたくせにこういう時の行動力は奏音の方があって、あたしはいつだって後ろからついていく形だ。

本殿は拝殿よりも小さく、木でできた建てつけの悪い引き戸を開けた中にはもう一枚引き戸があった。

そこまでする必要があるのかと首を傾げると、目の前で同じ動きをする奏音の姿がばっちり見えた。たまらず笑い声をあげると、奏

音は困惑したような表情を浮かべ振り返る。

「どうしたの？」

「ううん、なんでも——」

やはり自分たちは双子なのだと、一通り笑ってなんでもないと言おうとしたあたしの言葉は突然開いた引き戸の中に吸い込まれた。

「……」

「……」

「……」

引き戸を開けたのはもちろん源藏さんで、中からの光のせいで表情は見えないがその全身に纏うオーラが怒っていると物語っている。きつとあの年の割に若い精悍な顔を怒りで鬼の様に歪めているのであろうと容易に想像できた。なぜならあたしはこの十七年間、数えきれないほどそのお顔で説教され物置に閉じ込められているのだから。

「……入らない」

いつもなら教育的指導と称した拳の一つや二つとんでくるのだが、やはり今日の源藏さんは違うらしく小さく息を吐いて背中を向けた。そのらしくない姿に一度奏音と顔を見合わせ、あたしたちは大人しく中に入った。

「あの、源藏さん話ってなに？」

中に入ってから早二十分は経過しているであろう。最初は重い内容なのだろうと源藏さんが口を開くまで待っているつもりだったが、さすがにもう限界だ。小さい頃からしていたおかげで正座は苦でもなんでもなが、如何せんこのどっしりとした重い空気は苦以外の何物でもない。

「……」

しかし源藏さんは目も開けずだんまりを決め込む。その姿にあたと奏音は顔を見合わせお互いため息をついた。

することもないのでもう三度目となる本殿の中を首だけ動かして観察する。

畳十畳ほどの広さのこの部屋の奥には一段高い場所がある。その上に精巧に彫刻された台座が位置し、ご神体と見られる直径三十セ

ンチほどの銅鏡が立てられていた。

ご神体というからには人かなんかの彫像や銅像のような物を想像してただけに最初見た時はなんだか少し落胆した。でもそれも最初だけで、今は見れば見るほど美しくそれでいてどこか不安を煽るそれにまぎれもなく興味をひかれている。

じつと鏡を見つめていると、あたしたちと向かい合うようにしていた源藏さんが立ち上がって奏音の横に移動した。

「源藏さん？」

「どうかしたんですか？」

なんでわざわざ横に？　これではまるで誰かが来るみた――

「奏音！！　詩音！！」

聞き覚えのない声に名前を呼ばれ視線を向けると、さっきまで源藏さんが座っていた場所に一人の女の人が立っていた。

母親 壱

「遅い」

いきなり目の前に現れた女の人に名前を世ぼれ、呆然と見つめていると、不機嫌そうな源藏さんの声が聞こえはつと我に返った。

隣では奏音はまだ女の人をじつと見つめているし、その隣の源藏さんは女の人を軽く睨んでいる。と言っても女の人に対して怒りや憎しみといった色は見られず、どちらかというと何か愛しいものを見るようなそんな感じだ。

それに源藏さんは遅いと言っていたから、この人がここに現れることを最初から知っていた、というよりはここで待ち合わせしていた、の方が正しいのだろう。

次に例の女の人を見る。

まず目を引くのはその人の格好だろう。現代では結婚式の時ぐらいしかお目にかかることのない水色の生地 of 打掛には白い氷の花のようなものが刺繍されていて、若干季節違いな気もするが、涼しそうな柄という意味ではいいものかもしれない。中に着ている着物も浅葱色で全体的に青が目立つが、橙色の帯と赤い帯締めがいい具合にしている。

次に顔のつくりだが……うん、これについては文句のつけようがないほどの美人。癖のない真っ直ぐな艶のある黒髪は膝のあたりまでであった。あたしが今までに見てきた女の人の中で顔も髪も一番綺麗な人。奏音を癒し系とするならばこの人は姉御系。極妻にでてきそうな気品と凛とした強さを感じさせる。

ただ一つただけないのが、

「いやー、どの酒にしようかつい迷っちゃってね」

白魚のようなその手で持っている一升瓶。両手でお淑やかに持つならともかく、女の人はそう言いながら片手で源藏さんにちらつかせるように持つのだ。これはこれで親近感わくのだがどうせなら観賞用に微笑んでいてほしい。

そんなちよつと失礼なことを考えながらじろじろ見ていると、ばつちり目があった。

「……」

「……」

なんて声をかければいいのかわからなくて視線も逸らせずにいると、ありがたいことに今まで黙っていた奏音が口を開いた。

「あのー、失礼ですがどちら様ですか？ わたしたちの名前も知っているみたいですけど」

そのもつともな質問に女の人は自信に満ちたような笑顔を浮かべるところで答えた。

「私の名前は音波……あんたたちの母親よ」

「詩音はその……どう思う?」

「どつて……」

いきなり現れたあの綺麗な女の方は、いきなりあたしたち姉妹の母親だと言った。その突拍子もない言葉にあたしは驚きを通り越して呆れたのだが奏音はどうやら違ったらしく、震える声で「少し詩音と話をさせてください」と残し、あたしを連れて家の居間まで戻ってきていた。

「わたし一目見て思ったの。あの方はあたしたち、特に詩音に似てるって」

奏音の言う通り、あの人はあたしたちによく似てた。癖のない黒髪に黒い瞳、意志の強そうなちよつとつり上がった目にシミひとつない白い肌。あたしはあの人みたいに綺麗ではないが、どれをとってもあたしたちとよく似ていた。

でもあの人は……

「あの人どう見たって二十代よ？ 本当にあたしたちの母親なら最低でも三十二はいつてるはずでしょ」

今の今まで忘れていたがあたしたちは明日、正確には後一時間ほどで十八回目の誕生日を迎える。あるドラマでは十四歳の女の子が妊娠していたが、そこから計算すると今は三十二。いわゆるシングルマザーだったとしても世間一般では三十五、六なはずだ。

しかしあの女の人はどう見たって二十代前半、若作りしているとしても三十代には到底見えない。これが母親ではなく姉だったならばあたしたちは何も言わず信じていただろう。

「そうだけど……」

「それに昔源藏さんも言ってたでしょ、両親はあたしたちが生まれてすぐに事故で死んだって」

小学生の頃、あたしたちは源藏さんになんで両親がいないのか聞いた事があった。今思えばなんであんな事を言ったのかわからない。クラスの子たちに親がいないといじめられたのか、ただ疑問に思っていたことを素直に聞いたのか、とにかくその当時のあたしたちにとって両親がいないって事は大きな問題だった気がする。

そんなあたしたちの質問に源藏さんは凄く辛そうな表情を浮かべて、「事に巻き込まれた、今は会えない」と答えた。

その時のあたしたちはまだ幼なくて言葉の意味を理解できなかったが、何回か聞くうちに一つだけ、わかった事があった。両親の話をしたら決まって源藏さんは辛そうにする、だからあたしたちはそれからというものの一度も聞いた事ないし、両親に繋がりそうな話は

一度もした事がなかった。

そして少し大人になったあたしたちは言葉の意味を理解し、両親は事故で死んだんだと思って生きてきたのだ。

奏音も同じ事を考えていたのだろう、部屋には重い空気が立ち込めていた。

「……」

「……」

ボーン、ボーン、ボーン――

音につられて今時珍しい、飾りではない本物の振り子時計に目を向ければ、長針と短針が綺麗に揃って十二を指していた。

「源藏さん！」

まるでこの時を待っていたかのようにタイミングよく現れた源藏さんに奏音が詰め寄る。

「あの人は――」

「落ち着け。今から話をするそこに座ってくれ、詩音も」

源藏さんに促され、座布団の上に正座する。大事な話をするときは常に正座で背筋をちゃんと伸ばす事、それが源藏さんに一番最初に教えられた事だった。

あたしたちの向かいに座った源藏さんは一呼吸おいて口を開いた。

「本殿にいた女、音波は俺の姉だ。そしてお前たちの母親でもある」

いつになく真剣な顔つき、目だけで一人殺せるんじゃないかと思うほどの気迫、どれをとっても源藏さんが嘘を言っているようには見えない。
でも、

「そんな事急に言われたって信じられるわけない」

「詩音……」

「だってそうでしょ！？ 源藏さんが言ったんだよ、両親は死んだって、奏音も聞いてたじゃない！！」

「それはそうだけど……！」

だって仮にあの人が本当に母親だったとしたら、あの時の源藏さんはなんだっていうの？ 今の源藏さんが嘘を言っていない様に、あの時の源藏さんだって嘘を言っているようには見えなかった。

だから長い間あたしたちは両親の事を口にするのはやめたのに、本当はどんな人だったのか聞きたかったのをずっと我慢してたのに、

それが嘘だったなんてあたしは信じたくない。

「いい加減にしろ!!」

今にも取っ組み合いの喧嘩が始まりそうなたたしを止めたのは源藏さんだった。

そのがたいに見合った大きな手で拳を作り、机の上に叩き付けたのだ。机なんか見るも無残に真ん中から割れている。これで通算七十二脚目、それは同時にあたしたち姉妹が喧嘩した回数でもある。

落ち着いた（馬鹿力に引いたとも言う）あたしたちに満足したのか、源藏さんは大きく咳払いをして小さな声で「またやってしまった」と呟いた。

やって後悔するくらいなら初めからやらないで欲しい。

「一つ誤解があるようだが、俺はお前らに音波たちは死んだなんて言った覚えはないぞ」

「でも源藏さん昔、事故に巻き込まれたって言ったじゃないですか!？」

すぐに返された奏音の言葉に源藏さんはしばらく考え込むように難しい顔を見ると、ああと一人納得して何がおかしいのか笑っていた。

それには普段温厚だといわれる姉も少々キレ気味に「何笑ってんですか」と崩壊した机に身を乗り出すようにしている。

「すまん、俺はこう言ったんだ“事に巻き込まれた”と。お前たちが生まれてすぐにちよつとした揉め事があってな、それについて言つたつもりだったんだがまさか事故だと思つていたとはな」

事がまさかそついう意味だったとは……あたしたちはてつきり交通事故に巻き込まれたものとはかり思つていた。

しかし、“事”が事故ではなく揉め事だとすると……

「じゃあ“今は会えない”つてのも――」

「揉め事が落ち着くまでは会えないつて事だ」

つまり、あたしたちは勝手に両親が事故に巻き込まれ、勝手に死ぬまで両親に会うことはないと思ひ込んでいたわけだ。

なんか、両親が生きていたことを素直に喜べないばかりか、「だからお前たちは親の話をしなくなつたんだな」と一人納得している源藏さんに対して怒りが込み上げてきた。

これはいっちょ報復しないと気が済みそうにない。ちらつと奏音の方を見るとばつちり目があつた。

互いに合図を送り、二つにわかれた机に手をかけたところで突然閉めておいた襖が開き、例の女の人が現れた。

そして優雅な足取りで源藏さんの横まで行くと、それはそれは綺麗な笑みを浮かべ、左手に持つ一升瓶を頭部目掛けて一気に振り下ろしたのだつた。

母親 式

その後、源藏さんは不穏な空気を察して本殿から出てきたという女の人、音波さんによって制裁された。あの厳つい源藏さんが絶世の美女にぼこすか殴られるという物凄くシユールな光景にあたしはドン引きしていた。奏音はどうしたかつて？ ふ……あの天然な姉がその現場を止めるとでも思っているなら大きな間違いだ。奏音はあんなに声（悲鳴）を上げて喜ぶ（喚く）源藏さんを見たことがない、きつと久しぶりのお姉さんとの再会（暴挙）で泣いてるんだと、二人が怪我しない様にせつせと割れた瓶を掃除していたさ。

で、それからしばらくして事態は沈静。気を利かせた奏音がお茶と小さな机を持ってきて、あたしたち姉妹と源藏さんたちは向かい合うようにして座った。

「あの……あなたは本当にあたしたちのお母さん、なんですか？」

不安と期待が入り混じったような声で奏音は問う。
対する音波さんもどこか不安そうに首を縦にふった。

「今すぐ信じろなんて言わないわ。でもね、あんなたちはまぎれもなくこの私がお腹を痛めて産んだ子よ」

そう言っ て何かを思い出すように遠い目をする音波さんの目にはうつすらと涙の膜がはられていた。そうしてさっと立ち上がると、机が邪魔にならないところで膝をつき、頭を下げた。

「私はあんたたちに母親らしい事なんて何にもしあげてない。理由があつたとはいえ、この十八年間一度も会いに来なかつたし、手紙すら書いてない私には母親を名乗る資格なんてないのかもしれない」

「それは違う！！あの時はそうするしか他にな——」

「あんたは黙つてなさい！！理由はどうあれ私たちがこの子たちに何もしてあげられていないのは事実よ」

源藏さんは悔しそうに立ち上がりかけていた体を戻すと奏音が淹れたお茶を一気に呷る。音波さんはそれを見届けると、あたしたちと一度目を合わせてからまた頭を下げた。

どうやらあたしが考えていた以上にその揉め事というのは大きな問題だったのかもしれない。

「ねえ、その揉め事ってなに？」

仮に音波さんがあたしたちの母親だったとしたら、なんで一緒に暮らせなかつたのか、なんで一度も手紙すらくれなかつたのか、その理由を聞く権利があるはずだ。

奏音も同じ事を思つたのか、音波さんの手をとって「教えてください」とさりげなく頭をあげさせる。

しかし返ってきた言葉は意外なものだった。

「それは私の口からは言えないわ」

「なんでよ?!」

「帝が、あんたたちの父親が話すようになってるからよ」

帝? それがあたしたちの父親かもしれない人の名前……なんかかなり御大層な名前だな。確実に名前負けしてそう。

「で、その人とはいつ会えるの?」

帝さんに聞け、とか言っておいて会えるのは当分先ですなんて事だったら話にならない。そう思うとちょっと棘のある言い方になってしまった。

「今日、私の話が終わり次第会いに行くわ。もちろんあんたたちを連れてね」

そうして音波さんによるお話が始まったわけだが……

「まず最初に言っておくことがあるわ。多分これ聞いたら驚いて飛び上っちゃうから覚悟してね」

そう言ってニヤリと笑う姿は真剣なのかふざけてるのかよくわからないが、ここで突っ込んでも話が先に進まないので黙っている事にした。

内心では「聞いて驚け!!」なんて前置きした音波さんに「どっちなんだよ」と突っ込みを入れてしまったが、声に出してないのでノ―カウントだ。

「私、と言うよりここにいるひと全員、もちろんあんたたちも含めこの世界の人間じゃないから」

ふん、姉のぶっ飛んだ行動を小さい頃から見てきたこのあたしがそれぐらいで飛び上るわけな……

「人間じゃないってどういうこと?!」

飛び上りはしなかったものの、前にいる奏音にのしかかるようにしてあたしは身を乗り出した。

だってそうだろう、いきなりあんた人間じゃないのよーなんて言われて落ちていていられるのは我が姉ぐらいのものだ。現に奏音は「じゃあ哺乳類には当てはまるんですか?」なんて呑気に聞いている。

いや、確かに卵生か胎生か気になるところだけど今はそんな事よりも他に聞くことがあるだろう！

「どういうことってそのままの意味よ。私もあんたも奏音もこの禿も皆この世界の人間じゃないわ。じゃないとあんたたちの母親である私がこんなに若くて美しいはずないでしょ？ それから私たちは哺乳類だとか爬虫類だとかそんなもんには囚われない、常軌を逸脱した存在よ。ちなみに胎生だから安心して」

さりげなく源藏さんの事を禿と呼び、自分の事を美しいと言う音波さんは色々とぶっ飛んだ人で、奏音の母親である信憑性は高まった。それに自分が卵から生まれたわけじゃないと知ってほっとしたが、“常軌を逸脱した存在”？ それってつまりなんなわけ？ そもそも会えない理由って頭がおかしいと思って病院とかに連れて行かれたってわけじゃ……

「音波が言ってるのは全部ほんとだ。嘘じゃない」

確認の意を込めて、禿と言われた事に少しショックを受けているらしい源藏さんを見るとぼっち目があってあっさり肯定された。ちなみに源藏さんは禿ではなくスキンヘッドである。

で、あたしが源藏さんとそうこうしているうちに奏音は音波さんと話をしていたらしく、今一番聞きたいことを奏音が聞いたとこだった。

「じゃあ、わたしたちは何なんですか？」

それにたつぷり間をとって音波さんは答える。

「この世界の人間が言う妖怪ってどこかしら」

妖怪ってあの有名な幽霊族の少年が主人公の某漫画に出てくるあれでしょ？ でもあたしたちはもちろん源藏さんも確かに馬鹿力だけど、音波さんだって見た目まんま人間だよ。あんなデフォルメされた爪や牙もなければ首だって伸びないし。それともほんとに幽霊族の少年みたいに髪の毛レーダーみたいになるの？

素直にそう思った事を告げると、何が可笑しいのか源藏さんに笑われた。いや、いくら巫女さんだって言っても現代に住む女子高生の妖怪に対する知識なんてこんなもんだよ。

「私はその漫画を知らないから何とも言えないけど、一つだけ確かなのは私たちは“この世界の人間”じゃないって事だけ」

あの漫画を知らないってのにも驚きだが、一番気になったのは音波さんが強調して言った“この世界の人間”という言葉。それではまるで……

「このことは違う世界があるんですか？」

「そういう事」

奏音に答えた音波さんは「びっくりしたでしょ？」と悪戯が成功した時の子供みたいに笑って見せた。

そしてすぐに真面目な顔をして姿勢を正すともう一度頭を下げこ
う言った。

「遅くなってごめんね。あんたたちを迎えに来た」

と。

父親

あたしたちの母と名乗る音波さんから衝撃的すぎる事を聞かされたあたしたちは今、神社の本殿にいた。

源藏さん曰く、あたしたちが育ったこの世界と“異界”と呼ばれるあたしたちが生まれた世界は隣り合う世界で、行き来する方法は三つあるという。

一つ目は“鍵”と言われる一対の道具を使った方法。これが世界を渡る正規ルートで、一番安全かつ正確なのだが今現在“鍵”はうちの神社にあるご神体を含め三つしか存在しないそうだ。

二つ目は世界同士のちよつとした綻びから誤って他の世界へ渡る事。世間一般に言う神隠しの正体がこれにあたる。しかも世界同士の狭間に飲み込まれると大抵みんな正気を失ったり記憶をなくしたりするらしい。

で、最後が自分の力で世界の扉をこじ開けるという力技。こちらの世界でも異界でも出来る人は極僅か。ちなみに帝さんは出来るらしいので名前負けはしていないようだ。

「それじゃ行くわよ。準備はいい？」

準備も何も、有無を言わず連れてきたのはあなたですが、そう言ってやると音波さんは全く悪びれた様子もなく「だって奏音はともかく詩音は絶対来ないでしょう？」と扇であおいでいた。

母親がこんな性悪女だなんて……ならばせめて父親に期待しよう。そんな事を半目で考えていると、白衣の袖がちょんちょんと軽く引かれた。こんな事するのは一人しかないない。

「奏音？」

振り返った視線の先にあったのはどこか心配そうな姉の姿。あたしはてつきり異界に行く事に大はしゃぎしてると思ってたからとにかく驚いた。

「え、具合でも悪いの？」

「ううん、そうじゃないの。ただ……異界に行って帰ってこれるのかなと思って」

そう言って落ち着きなく視線を動かす奏音があたしには理解できなかった。

だって音波さんは異界から来て、これからあたしたちを連れて異界に戻るんだよ？ という事はご神体がある限り、ある程度自由に世界を行き来できるって事なんだし、神事で忙しい源藏さんもついてきて来てくれるって事はまたすぐ戻らなければならいんだからそれに便乗すればいいだけの話だ。

それと同じ事を奏音に言ってみると、「そうだね、わたしの考えすぎなのかも」って笑っていた。その笑顔に若干影はあるものの、そこにいたのはいつもの天然な姉の姿でちょっとだけ安心した。

「話は終わったか？」

どうやら待っててくれたらしい源藏さんに頷くと、音波さんの「じゃ行くわよー！」の合図であたしと奏音はどちらからともなく手を繋いだ。

音波さんがご神体に触れると、鏡の部分が波紋の様に波打ち光を放ち始める。最初は弱々しかった光も次第に強くなり、あたしたちは光の中に飲み込まれてしまった。

その常識では考えられないような事の中にいながら冷静でいられるのは、偏に姉の存在だと思う。

大丈夫よ、奏音。あたしはもう、二度と奏音を悲しませたりしないから。

次に目を開けた時、そこは古びた本殿の中ではなかった。本殿よりも少しだけ広いこの部屋は、家が全部畳張りのあたしから見たらとにかく異質。白い石造りの床はぴかぴかに磨き上げられていて、薄っすらとだがあたしを映し出している気がする。周りには等間隔に並べられたこれまた白い柱が天井まで伸びていて、部屋の中央にある台座の上には神社にあったご神体と同じ銅鏡が立てられていた。

「奏音、大丈夫？」

「う、うん。ちょっと眩しかったけど、詩音は？」

「あたしも平気」

目をちゃんとつむっとけばよかったと言う奏音にため息がこぼれた。普通あの光の中で目を開けてようなんて考える人がどこにいるって……

「あー目が焼けるかと思ったわ」

「普通開けないだろう」

「うつさいわねー。あら、詩音ったら人の顔じつと見てどうかした？」

「いえ、別に」

いたよ、目の前にもう一人。なにこれ、血は争えないって事なの？ 奏音の天然要素はすべてこの人から受け継がれたって事なの？ そんなにあたしたちに母親だって事を認めさせたいわけ？ なんかもうどうでもよくなってきたなー。

一人、半放心状態になっていると移動を開始したらしくあたしは奏音にすべてを委ね、暗い廊下を照らす為に置かれた行燈の数を数える事だけに集中した。

二百を越えたあたりで数えるのが面倒になり放棄してから少しするとようやく目的の場所へついたらしく、先頭を歩いていた音波さんは振り返った。

「ついたわよ。この襖の向こうにあんたたちの父親がいる、これから聞く話はとても重要な事だからしっかり聞いて。特に詩音、いい加減に戻ってきなさい」

拳を握って名指しで強く念を押されたもんだからさつと背筋を伸ばした。いや、だって源藏さんすら手も足も出ないお方にあたしが敵うはずないんだもん、ここは一つ反抗なんかせずに大人しく従った方が身のためだ。

音波さんはそんなあたしに満足そうに「うんうん、子供は素直が一番」と頷くと体の向きを変え、襖を開け放った。

「さあ、お父さんとのご対面よ」

どうか音波さんの様なぶっ飛んだ人ではありませんように！！
あたしは奏音の後で部屋に入りながら切実に願うのだった。

部屋の中は時代劇などで見かけるような広い和室だった。廊下や柱が木造で障子や襖もあったので、もしかしてと思ったがどうやらあたしの予想は当たったらしい。この屋敷はどうやらかつての日本建築のようだ。着物を着ている音波さんが洋風建築のお城や宮殿で暮らしていたらそれはそれで面白いが、やはり着物にはこの方がしっくりくる。それにしても柱の装飾とか見る限りこの屋敷の主は相当の地位とお金を持っているらしい事がわかる。

一通り部屋の中を見渡すと、あたしの目は部屋の奥の一段高い場所に座っている一人の男の人を捉えた。

この人があたしたちの父親……

「よく来た、そこに座るといい」

少し低めの男らしい声で促され、あたしと奏音は言われたとおり並んで座った。

すると男の人は何も言わず立ち上がり、段を下りて、手を伸ばせば届く距離に腰をおろした。その横には音波さんが当たり前の様に座り、あたしたちの少し後ろに源藏さんもいる。

近くに来てようやくわかったのだが、この人かなりのイケメンだ。後ろに撫でつけられた髪は漆黒、同じ色の睫毛に縁どられた切れ長の目から覗く瞳は鈍く輝く銀。そして例の如く若い、見た目は二十代後半。服装は白い着流しというかなりラフなものだ。

実際に世界を渡った今、異界だとか妖怪だとかに疑問は抱かないというか抱けないがこれで音波さんたちが本当に向こうの世界の間じゃないって事がわかる。

「お前たちに会った時、最初に何を話すか考えていたんだが……どうやらそれは無用だったらしい、息災であつたか？」

息災って、元気だったかつて意味だね？ とりあえず奏音につられて頷くと男の人は「そうか」と少しだけ安心したように小さく息を吐いた。

どうやらこの人はまともなようだ。

「あの、あなたがわたしたちの、その……」

言いよどむ奏音に男の人は手をあげて制すと、自ら話してくれた。

「お前たちの父、そしてこの原初の国を統治する氷帝明日良あすらいとは儂の事だ」

「……」

「……」

自信に満ちた男の人の発言に、あたしも奏音も何も返せない。

どうやらこの人、我が父の名前は帝ではなく、明日良と言つらしい。そして、ここ異界の国を統治する氷帝とかいうかなりの大物で

……

あたしもうお腹いっぱいなんで帰っていいですか？

家族

かくして天然で大和撫子の姉に加え、異界の権力者らしい父とバイオレンスな母を手に入れたあたしは、幼少期と一緒に暮らさなくてよかったと思い始めていた。

「では本題に入るとしよう」

本題。あたしたちが親元を離れ源藏さんと暮らさなければならなかった理由。

その言葉にあたしも奏音も自然と姿勢を正す。それを見た明日良さんは源藏さんに「よく育ててくれた、感謝する」と礼をする。それに対して源藏さんは「俺の姪なんだから当たり前だ」とどこか照れくさそうに答えた。

音波さんの弟である源藏さんは明日良さんの義理の弟にあたるのだが、雰囲気からみて二人の関係はそれだけではないように思う。まあこの辺はおいおい判明していくだろう。

「話しをする前に、まず簡単にこの世界について話しておかなければならんな……この異界と呼ばれる世界には十二の国が存在する。してその国を統治するのが“帝”と呼ばれる者たちだ」

「ということとは明日良さんも帝のうちの一人なんですね」

明日良と奏音に名前と呼ばれた時、一瞬だけ悲しそうに表情を曇

らしたが音波さんがそつと手をとるとそれはすぐになりを潜めた。

「少し違うな。確かに僕は十二人の帝のうちの一人だが、僕は“最初の国”の帝の氷帝又の名を始帝という。我が国について他の帝は口を出せずとも僕は出せる。もっとも出すつもりなど毛頭ないが」

「帝は統治機関、始帝はその統治者だと思ってくれ」

なんか色々単語が出てきて理解できずにうんうん唸るあたしを見兼ねたのか源藏さんが助け舟を出してくれる。

つまり国を治めるのが帝で、その十二人いる帝の頂点に立つのが始帝である明日良さん。

「てことは、もしかして異界で一番偉い人？」

「一応そうなるな」

権力者は権力者でも、権力者の上をいく権力者だなんて……どんな平穏な人生から遠ざかって行ってるような気がする。

げんなりした気持ちのまま明日良さんの話を聞いていると、しばらくしてようやく本題に入った。

「僕が帝になったのはいまから十五年前。先代の始帝である父、お前らの祖父は最後まで国の為、世界の為、と身を粉にし、今なお賢帝と民から慕われておる。しかし先代は少々うっかり者でな、次代

の始帝を指名せぬまま帰らぬ人となつてしまい空白となつた始帝の座をかけて阿呆な兄たちが争いを起こしたのだ」

いや、あたしの血縁者つてどこまでキャラ濃いよ。お祖父ちゃん賢帝とか言われてるらしいけどうっかり指名し忘れて争いの火種作つたらそれはもう賢くないと思うんだけど。

でも争いを起こしたのが明日良さんの兄弟ならなんで明日良さんが帝をやつてるんだろうか、疑問に思つて聞いてみた。

「儂はもともと帝なんかに興味はなかつたんだが、如何せん周りはその見なかつた。して儂もその争いに半ば無理矢理入れられてな、ちようどその頃生まれとお前らに危害が及ぶのを避ける為、音波の弟であり儂の旧知の友人でもある源藏とその妻の真咲に頼み世界を渡らせたのだ」

なるほど、揉め事つてのは帝の座を狙つた兄弟同士の三つ巴だったのか。確かにそんな争いの中に生まれたばかりの赤ん坊がいたんじゃないと思うように身動きが取れないし、相手にとっては抵抗できない赤ん坊の息の根を止めるのは容易くい交渉の道具にもなるだろう。だから二人はあたしたち姉妹を源藏さんたちと一緒に世界を渡らせたのか。

ん？ さっき明日良さん“真咲”つて言わなかつた？

「あの、真咲さんもこちらの世界の人、なんですか？」

「ああ、真咲はまぎれもなく異界の住人で俺の妻だ。それについて

詳しくはまた話す。多分本人も自分の口から話したがるだろうからな」

あたしの代わりに質問してくれたのは奏音で、それに答えてくれたのは源藏さんだった。とりあえず今は話してくれないらしいし、本人もって事はまた会えるらしいので一先ず保留。

奏音と二人で顔を見合わせると、少しだけ笑って明日良さんたちに向きなおった。まだ明日良さんが帝になったわけを聞いていない…… まあ聞かなくてもだいたいわかる気がするけど。

明日良さんはあたしたちを一度見てからまた口を開いた。

「お前らを異世界に渡らせた後、儂らに残されたのは子を奪われたという言いようのない怒りだけだった。そこでだ、愚かな兄たちに争いを止めさせ、早くお前らを迎えにいかうとその怒りの全てをぶつけ、愚兄を完膚なきまで打ちのめした時には自然と帝の座についていた」

うん、顔も知らなかった両親に愛されていたのは凄くわかった。

わかったからその体から出るオーラの的なのをしまつて欲しい。さつきからなんだか少し寒いなーなんて思っていたのはどうやら明日良さんを中心に広がる淡い水色の靄のような物が原因らしい。

それに気づいた音波さんが「興奮して妖気を出すな!!」って殴った事からあの靄のような物が妖気というスピリチュアルなものだと分かった。

にしても異界を統べる始帝の地位をお菓子のおまけみたいに言うんだから、明日良さん恐るべし。

「明日良さんが帝になったわけはわかりました。でも、帝になったのが十五年前ならどうしてその時に迎えに来てくれなかったんですか？」

奏音の言う通り、決着がついてすぐ迎えに来てくれていたらあたしたちはまだ三歳。その時に会っていたならあたしたちは何の抵抗もなく二人を「お父さん」、「お母さん」と呼んで慕っていただろう。でも、二人は来なかった。

最初から誤解だったが両親はもうこの世にいない（実際に違う世界だった）と思って生きてきたあたしたちには素直にそれを受け入れるだけの柔軟さはない。

あたしたちと同じ髪の色だとか、奏音と同じ天然なところだとか似ている部分を見つける度に、親子なんだろうなって頭の中では理解できても、心はそうはいかないのだ。

ふと、二人がお互いに手を強く握り小刻みに震えているのが見えた。

「儂らはもちろんすぐにお前らを迎えに行くつもりだった。しかし、帝になると身内だけだった敵が外にまで増え、お前たちの身の安全を考えるとすぐには迎えに行けなかった。しばらくしてその問題が落ち着くと、表舞台に一度も出ていないにも関わらず何故か始帝の姫はそれは美しい双子の姫だと噂が流れたせいでお前たちに次々と縁談の話が出てきたのだ」

あたし、今迎えに来てもらってよかったかも。奏音は物腰もやわらかく、天然思考のくせに成績優秀で運動神経抜群の文武両道を地

で行くような人間だからいいとして、あたしは何事もそれなりにできるだけの平凡だ。こっちの世界だときつと比べられまくった拳句、扱いやすい奴と思われてがんがん利用されそう。

「ならばいつその事、お前らの力の封印が解ける十八回目の生誕祭までは異界よりも安全であろうむこうの世界で暮らすようにしたのだ。もつとも、詩音に彼氏などと言うものが出来たのは予想外だったかな」

あたしに彼氏がいる事なんで知ってるんだろう……てか予想外つてのはあたしみたいな女に彼氏ができるなんて、という意味ではないよな？ そうだったらいくら温厚なあたしでも音波さんよろしく蹴りの一つは入れるぞ。

そうやってあたしが彼氏の事について考えていると、奏音は別の事について考えていたらしい。

「封印ってどういう事ですか？」

身を固くしている奏音の背中をそつと撫でると、はっとしたように体を飛び上らせてから幾分か力を抜いた。まだ少し固いものの「ありがとう」と言った時に笑えていたから大丈夫だろう。

「封印というのは光帝が使う能力の事だ。お前たちの首の後ろに入れ墨のようなものがあるだろう」

「あるけど、あれが封印……」

あのタトウーが封印ねー。あれのせいで幼少期は苛められ（振り返りにした）、学校の教師には目をつけられ（呼び出しは全部無視）、夏でも外に出る時は髪をおろさなければならなかったのは全部明日良さんのせい。どうせなら服を脱がないとわからないところにしてもらえばいいものを。

「いかにも。儂ら異界の民が異世界で暮らすには妖気を抑え込まねばならん、しかし生まれたばかりの赤子が自分で妖気を抑え込むなど出来るはずもなく、儂は光帝に頼みお前たちの力を封じた。まあそれもお前たちが十八になる時、後一時間ほどで解かれるがな」

いや、別に封印解けて明日良さんみたいに露出せるようになるのはいいんだけどね。一つだけ聞いておきたい事がある。

「二人はあたしたちを向こうの世界に帰す気ある？」

さっきまでわりと和やかな空気だったのが、あたしの言葉で一気に張り詰めた。

それだけで帰す気はないと言っているようなもんなのに明日良さんは「何故そのような事を聞く」とあくまで質問には答えない形で返してきた。

「そんなの決まってるでしょ、ここはあたしたちがいたい場所じゃないからよ」

二人があたしたちの両親で、あたしたちの本来いるべき世界がここだとしても、あたしたち自身が望むのはここではない世界のあの場所だ。

あそこには友達や恋人、お世話になった人がたくさんいる。でもここには両親らしい人物と源藏さんに真咲さんしかいない。

「お前は血をわけた家族よりも血の繋がらない異世界の民を選ぶというのか」

明日良さんの声は感情が入っていないんじゃないかと思うほど無機質なものだ。しかしその鈍く輝く銀の双眸には様々な色が浮かんでは消えを繰り返している。

「選ぶ、選ばないの問題じゃないの。神社にご神体があれば、会おうと思った時にいつでも会える。だったらあたしたちは元の世界に帰るわ」

「ならん」

「どうして!？」

二人を両親だと受け入れきれない今のあたしたちには考える時

間が必要で、これから先どう転ぶかはわからないがとりあえず今は顔合わせだけして別々に暮らし、時間をかけて互いに受け入れていくのが一番良い方法だとあたしは思う。明日良さんたちにならそれくらいわかるはずだ。

大きな声を出した事で、心配した奏音が手を握ってくれた。奏音が触れる左手から伝わる温もり、それだけで少し冷静になれるんだから不思議なものだ

手を伸ばせば届く距離にいる明日良さんは怒気を含んだ目でこちらを見据える。

「お前たちの封印はもうじき解ける」

「だったら自力でその妖気とかやらを抑え込む。それなら文句ないでしょ？」

「ふん、やれるもんならやってみるがいい。ただし出来なければ、その時はここで暮らしてもらう」

「上等よ。後で神社に追いかけて来たってお被いして追い返してやるから」

明日良さんはもう話すつもりはないと言わんばかりに鼻で笑うと、最初いた一段高い場所に行って腰をおろした。

その行動に俄然闘争心を燃え上がらせたあたしは無意識に奏音の手を力の限り握りしめていたらしく、本人にやんわり外される。

そんなあたしたちをどこか心配そうに見ていた音波さんも、明日良さんに呼ばれてその隣へと座り、どこから出したのかお酒を飲み始めた。

「詩音……」

「心配しなくても大丈夫。天下の始帝の娘みたいだからその辺はきつと上手くいくわよ」

不安そうな奏音を勇気づける為に言った言葉は嘘ではない。昔から何をやらせても人並み以上に出来ていた奏音ならきっと妖気を抑え込むのだって上手くいくはず。問題は何をやらせても人並みのあたしだ。

しかしそんなこと言っていられる状況じゃない。死ぬ気で頑張らねば。

そうして刻一刻と時間が過ぎるなか、音波さんが爆弾を落としてくれた。

「言い忘れてたけど、あんたたちには花嫁修業してもらってから」

姉と妹

重い瞼を持ち上げると、いつもより高いところに天井があつてここがいつも寝起きしている自分の部屋ではない事に気がついた。気怠い体に鞭打つて、上半身を起き上がらせ部屋の中を見渡す。広くもなく、狭くもないこの部屋にはあたしが寝ている布団ともう一つ、もぬけの殻となつた布団が横に並べられていた。

「夢オチだつたらよかったのに……」

あたし以外に誰もいない部屋で呟かれた言葉は小さいものだったはずなのに、とても大きく聞こえ、なんだか寂しい。何もする事がないのだから……としていると、どうしても気を失う前の出来事が頭の中に蘇ってくる。

音波さんに爆弾を投下され、どういふ事が詳しく説明してもらおうと立ち上がった瞬間、隣で奏音が悲鳴をあげた。

「奏音?!」

慌ててその横で膝をつくも、いきなりの事だったので何をしていいのかわからない。

「んあぁっ!!」

苦しそくに喘ぐ声を聞いているだけで何もできず手を彷徨わせていると、首の後ろが焼けるように熱くなってパリンと何かが割れるような音がした。

「いつ?!」

今までせき止められていた何かが一気に流れ込むような感覚に、堪らず声を上げて畳へうつ伏せに倒れこむ。

どうやらこれが封印が解けるって事らしい。想像していた以上の辛さに早くも根を上げそうになるが、ここで諦めては奏音を連れてあの場所に帰れなくなる。

「奏音!! 詩音!!」

焦ったような音波さんに名前を呼ばれ、飛びそうになった意識をなんとか引き戻す事ができた。

「僕は詩音を、お前は奏音を頼む！」

「任せて!!」

明日良さんに返事をした音波さんは、奏音を片手でひょいと抱き上げると源藏さんと一緒にそのまま部屋を出て行った。

さっきあんな事があったせいで、明日良さんと二人残された事にちよつと気まずさを抱きながら首だけ横に向けると、いつのまにか隣には明日良さんがいた。その顔は今日見た中で一番人らしく、焦りや不安を滲ませている。

「よく聞け詩音、今はまだ己の本来持つ妖気が身体を満たそうとしているだけで危険はない。しかしそれが終われば、過ぎる妖気を体から出そうとする。そうなれば無理に抑え込もうとすればするほど己を苦しめ、お前の身体がもたん。抑え込むのが無理だと思うたら意地を張らずに素直に言え、今ここで死に二度とむこうの土を踏みぬのか、生きてこれから先向こうに行く機会を待つのか、お前ならどちらが良いかわかるであろう」

今の状態でもかなり辛いのに、この後これ以上の事が起こるなんて考えたくもない。しかし明日良さんの目はいたって真剣で、生きるか死ぬかなんて言われたら誰だって頷くと思う。今ここで無理して死んでしまったらそれこそ本末転倒もいいところだ。

それよりなんかだんだん寒くなってきたんだけど、これって死にそうって事じゃないよね？

さっきまで滝の様に流れ込んでいたものが次第に小さくなっていき、やがてぴたっと止まった。

「来るぞ!!」

何が、なんて言わなくてもわかる。

体からじわじわと溢れ出す妖気は明日良さんと同じ薄い水色で、淡い光を放っている。その神秘的な光景の中心に自分がいると思うとなんだか場違いな気もするが、そんな事を考えていられるのもそこまでだった。

次第に強くなっていくそれを抑えようと自分なりにいろいろしてみたが、全くと言っていいほど効果は得られず、逆に力んだりすればするほど強さが増していく。

「力むのではなく、心を平静に保つのだ」

いや、そんなこと言われたって今日一日で起きた非科学的な出来事と真事実、さらには花嫁修業がどうのこうの言われては、いくら奏音で突飛な事に免疫があるあたしでもさすがに動揺するし苛々だつてする。

結果平静を保つどころか行き場のない感情が自分の中で渦を巻いて、一気に外に出た妖気が部屋の中を一面銀世界に変えてしまったところであたしは気を失った。

しばらくその時の事を考えていると、誰かが廊下をすり足で移動する音が聞こえた。音の主はこの部屋の前で立ち止まる。開けられた障子の先にいたのは、

「奏音……だよね？」

「何馬鹿な事言ってるの！ 全然目覚まさないから心配したんだよ！？」

その声は間違いなく奏音のもので、あたしは自分の目を疑った。音波さんよりも少し短い太ももの辺りまで伸びた癖のない黒髪、これでもかかって言うくらい長い睫毛に縁どられた少し垂れ気味の目は黒耀石のようで、透き通るように白い肌と互いに互いをひきたてあっている。前から雑誌にとりあげられるほどの美貌を持っていたが、今は一段と美しさに磨きがかかり、最早人外の域に達している。これは向こうに帰った時が大変だなーと遠い目をしていると、奏音は棚に置かれていた鏡を手に取りあたしのすぐ傍まで来て腰をおろした。

「はい、これ」

そして一度も自分は使う事無くあたしにむかって差し出す。意味がわからずじつとそれを見つめていると、呆れたようにため息をつきあたしに自分の顔が見えるように鏡を持つ。

「……んん？」

そこに映ったのは奏音と同じように肌とか髪に補正をかけられたあたしの顔。いつもと同じようにやる気のない怠そうな顔は、一つだけ大きく違う所があった。

「気づいた？」

きらきらと目を輝かせる奏音に、あたしは呆然と首を縦にふる。

あたしの目、明日良さんと同じ銀色になってた……。

突然の変化に最初こそ混乱したものの、自分でも驚くほどすんなり受け入れられた。たぶんそれは奏音が「綺麗」だって言ってくれたのと、明日良さんと同じ色だったからだと思う。これが赤とか黄色だったら間違いなく発狂していた自信がある。

とまあ、あたしの目の事はどうでもよくて、重要なのはこれからの事についてだ。

どうやら奏音も妖気を抑え込むのに失敗したらしく、あたしが目を覚ます少し前に意識を取り戻し、何をしてもあたしが起きないから心配になって人を呼びに行こうと部屋を出た。しかしこの屋敷がまたかなり広かったらしく、ここに戻ってこようにも道がわからず困っているところを親切な男の人に途中まで案内してもらってこの部屋に戻ってきたらしい。

「それなら音波さんたちのとこに案内してもらえばよかったんじゃ

ないの？」

「うん、それも考えたんだけどね。その男の人は明日良さんに会いに来たらしくて、代わりに伝言をお願いしたの」

「ふーん、その人の名前は？」

異界にもまともな人がいたんだ……みんなあの二人みたいにぶっ飛んだ人だったらどうしようかと思っただけにちよつと安心した。

明日良さんに会いに来たって事はその人の名前さえわかれば後でお礼も言えると思って奏音に聞いたのに、当の本人は名前を聞くのを忘れたそうだ。

いつも礼儀作法にうるさい奏音だからちゃんとお礼を言っているとはずなのでその辺は心配ないが、出来る事ならあたしも会って話がしてみたかった。

「ねえ詩音。わたしたち、どうなっちゃったのかなあ」

「奏音……？」

俯く奏音にあたしはなんて声をかければいいのかわからない。

「詩音は気づいてる？ わたしたち、見た目以外にも変わってる」

「うん」

最初に部屋の中を見た時から気づいてた。あたしの視力は以前とは比べ物にならないくらいよくなってる、まるでゲームのスナイパーになった気分だ。それに目だけじゃない、さっき奏音が廊下を歩いていた時も前のあたしだったら何も聞こえなかったと思うし、心なしに嗅覚までよくなっている気がする。

「それだけじゃないわ……わたし、この屋敷の中を結構歩き回ったの、でも全然疲れなかった。お腹も減らなくて、汗もかかなくて、息一つ乱さなかった」

人間は疲労が溜まると眠くなり、食欲がわく。いくら歩いても疲れないうて事は、それぐらいじゃ疲労を感じない丈夫で体力のある体になったただけなのか、それとも疲労そのものを感じないモノになったのか。

何にしてもあたしたちの体はもう、むこうの世界の人間とは違うモノになってしまった。

「わたしたちはもう、普通の人間とは違うんだね」

奏音の鈴のような声で紡がれた言葉は、あたしたちにとって死刑宣告にも等しいものだった。

むこうの世界で人間として暮らしていたあたしたちは死んだ。今ここにいるのは、異界の住人、妖怪としてのあたしたち。

「奏音……大丈夫。あたしがここにいる、奏音は一人じゃない」

「詩音……ふ、ダメなお姉ちゃん、ご、ごめんね……う、んっ」

あたしたちは双子でよく似ている。でも、ほんの数分の差であたしたちは“姉”と“妹”というものにわけられた。同い年にも関わらず奏音はいつも、あたしより数分早く生まれただけで“姉”として見られ、周りから「お姉ちゃんなんだからしっかりね」と言われ続けた。そして優しい奏音は周囲の期待に応えようと人前では絶対涙を見せなくなり、勉強にも家事にも一生懸命に取り組んだ。

そんな奏音とは逆に、“妹”であるあたしは「お姉ちゃんはあるに優秀なのに」って周りから比べられ、バカなあたしは一時期奏音に対して強い劣等感を抱くようになっていた。

そしていつしかあたしたちは“姉”と“妹”という見えない鎖に繋がれてしまったのだ。

「うっん、あたしも泣いてるから、これでお相子」

奏音を悲しませないって決めたのに、あたしはまた泣かせてしまった。もう二度と奏音の涙は見たくないって思ってたのに……

あたしたちはお互いの存在を確かめるようにぎゅっと体に回す腕に力を込めた。

「詩音、ありがとう……」

「うっん、こっちこそありがとね、奏音」

人間じゃなくなっても二人一緒なら大丈夫。

苦しい時、悲しい時、辛い時は半分に分けて昇華しよう。

楽しい時、嬉しい時、幸せな時は二人で一緒に共有しよう。

あたしたちが泣いているのを知るのはこの部屋にある物と廊下に
いる二人だけだった。

花嫁修業 壺

異界に来てから早三日。明日良さんたちとはあれから一度も会ってない。

お腹もすかなければ便意や尿意といった生理的な事もないあたしたちは部屋から一步も出ず、ただ無意味に時間が流れるのを感じながら話をしていた。それは他にやる事がなかったから仕方なくとかじゃなくて、そうでもないあたしが不安で押しつぶされそうだったからだ。

そうして話しているうちにわかった事があった。

一つは自分たちの力について。妖気という言葉聞いた時からなんとなくそんな気はしていたが、案の定あたしたちには超能力的な力があつた。あたしの方はどうやら氷を操れるみたいで、歪ながらも猫型ロボットとか子猫ちゃんを造ることができた。一方奏音の方はまだよくわからなかった。それについて本人はちよつと残念そうにしていたので理由を聞いてみると、どうせ人間じゃなくなったんなら世界征服できるほどの力があつたら素敵だとのこと。世界征服できるような力のどこが素敵なのか皆目見当つかないが、奏音はすでにこの状況を自分なりに受け入れようとしているらしい。

もう一つは、奏音はあまりむこうの世界に未練がないという事。人間じゃなくなった事に対してはショックだったが、元に戻ったと考えればそれほど辛くはないと笑っていた。でも確かにあの二人が両親だとしたらあたしたちはこの世界の住人で、今の状態が普通という事になる。

で、一番驚いたのがこれ。

「音波さ、……お母さんたちとはいつ会えるのかなあ」

奏音はすでに二人を両親だと受け入れている。天然だが人を見る眼はある奏音の事だからそう遠くない内に二人を父、母と呼び出すだろうと思っていた。でもまさかこんなに早いとは思ってもみなかったのだ。

「なんでそんなにすぐ受け入れられるわけ？」

いい人だと思う。封印が解けた時の音波さんの声は本当に心配しているようだったし、明日良さんはあたしにチャンスをくれた。あたしたちを違う世界に渡らせたのも、十八年間迎えに来なかったのも全部あたしたちの事を考えての事だった。勝手に両親は死んだと勘違いしてただけで、本当はずっと知らないところで愛してくれていた。

それでも、あたしにはあの人たちを受け入れるなんてすぐには無理だ。あの人たちとあたしとは、住む世界が違う。

「んー……なんでだろう。わたしにもよくわかんない、かな」

顔をちよつと赤くして、困ったように笑う奏音はとってもかわいくて、憎たらしかった。奏音はいつもそう、あたしができない事をすぐにやってのける。そんな奏音があたしには輝いているように見えて、眩しい。

ふと、よくなった耳がどたと乱暴に誰かが廊下を歩く音を拾った。音からして人数は一人、あたしたちは敷きっぱなしだった布団を急いで片付け誰であってもいいように正座で出迎える事にする。

だいぶ距離があつたみたいで、音の主が部屋の前まで来るのには少し時間がかかった。視力は文句なしに便利だがこっちは正直微妙だな。

——スパーンッ！

小気味いい音をたてて障子戸を開いたのは今さっき奏音があげた人物だった。こないだと同じ白い氷の花の刺繍された水色の打掛と浅葱色の長着、帯は橙色から赤色に、帯締めは銀色になっていた。音波さんはその美しい顔であたしたちを順番に見つめると、にやりと音がしそうな悪い笑みを浮かべて口を開いた。

「今日からあんたたちには花嫁修業をしてもらう、もちろん意義は認めないからついてらっしゃいっ！——」

あれ冗談じゃなかったんだ……

連れてこられたのは全面板張りの体育館を彷彿とさせる広い部屋だった。床は所々へこんでいたり傷がついていたりして、こないだ見た白いコンクリートのようなものでできている壁にはひびが入っ

ていた。

「……武道場？」

「その通り！！ さすが奏音、源藏が言ってた通り頭がいいわね」

ぼつり、と奏音が漏らした言葉に大げさなほど反応する音波さん。ここに来る途中、奏音にお母さんと呼ばれたのがそんなに嬉しかったのか今の音波さんのテンションは見ていて怖いものがある。

しかし武道場とは……花嫁関係あるの？ 普通花嫁修業と言ったら、家事全般と礼儀作法、いかに姑と仲良くすごすかの処世術に必要性をあまり感じない茶道、華道とかだと思っただけ。

その疑問はしっかり奏音が聞いてくれた。

「あの、武道場で花嫁修業って今まで聞いた事ないんですけど、何をやるんですか？」

「武道場でやる事っていったら一つしかないでしょう」

それはつまり武道を学ぶって事、だよな。

その理由がわからなくて頭を悩ませているのを知ってか知らずか、音波さんはその場に座るよう促した。広い武道場のど真ん中で女が三人正座しているのは、はたから見るとおかしな光景なのかもしれない。

わざとらしい咳払いをする姿は美しいが、やっぱり奏音と同じ匂いがする。

「妖怪に特殊な力があるのはもう知ってるわね」

「あたしはわかってるけど奏音はまだわかってない」

「あ、心配しなくてもいいわよ。奏音の力は私と同じだから」

力がわかった事にほつと胸をなでおろす奏音とは逆に、あたしはとても不安になってきた。いきなり弟を一升瓶で殴りつけるような人と同じだなんてきつと碌なもんじゃないぞ。

「私と奏音の能力は肉体を活性化させる力でね、脚力を強くすれば速く走れるし腕力を強くすればその辺のしつこい男なんて軽く一捻りにできる乙女にはもってこいの力よ。怪我した時なんかは細胞を活性化させて簡単に治す事もできるしね」

果たして乙女に男を一捻りできるような力が相応しいのかどうかは甚だ疑問だが、あたしの氷と比べるとかなり実用性のある力なのは確かだ。早く走れるなら追われても撒く事ができるだろうし、行き止まりになっても飛び越えればいい。最悪の場合、壁を壊す事ぐらいは造作もないだろう。

奏音の力については心配しなくても大丈夫そうだ。

「で、その力の元になっているのが妖気なんだけど、これが厄介な事に感情に流されて暴発しちゃう事があるのよ。本来なら小さい時

から訓練をしてそんな事滅多に起きないんだけど、色々あって何もしていないあんたたちは言ってしまうば赤子も同然。ちよつと苛々しただけでも力が暴発して周りを傷つける事になるわ」

口調は軽いが内容はけつこう重い話だった。
隣では奏音が息を飲んだのがわかる。

「大切な人を自分のせいで傷つけるなんて嫌でしょう?」

音波さんが言う大切な人ってのは恋人とか将来の夫の事を指しているんだろう。でもあたしにとって大切な人は……。

顔を横に向けるとそこには真剣な面持ちで音波さんを見つめる奏音がいた。

「あたしやる」

「わたしも、わたしもやります!」

あたしたちの返事に満足したのか、音波さんは嬉しそうに微笑んだ。その瞳はどこまでも温かい。

「あんたたちならそう言うと思ったわ。じゃあ早速、腕立て腹筋背筋スクワット百回を、五セット。ほらばさつとせずにさっさとはいじめ!」

音波さんはどうやらスパルタのようです……

？

花嫁修業 貳

花嫁修業四日目。

今日もあたしたちは寝間着のまま武道場で筋トレに精をだしていた。なぜ寝間着なのかというと、実はこの寝間着はまだ力をうまく扱えない子供なんか着るものと同じ素材で出来ていて、着ているだけで暴発を防いでくれる優れものなのだ。ちなみに妖怪は汗とかをかかないので、土や血で汚れたりしない限り基本的に服は同じものを着続けるそうだ。

しかしいくら体は疲労を感じないとはいえ、こう毎日鬼の監視の元で体を動かしていると精神的にくるものがある。

「ほらそこ！　しっかり走れ！！」

ちょっと考え事をして走るペースが遅れただけですぐにこれだ。あれから指導の鬼となった音波さんは事あるごとに声を荒げ、今日なんかは竹刀まで持ってきて床に叩き付けている。形から入るタイプなんだろう。

「返事はどうしたあ！」

「はいッ！！」

ほんとどこの熱血顧問だよ。インハイなんか目指してないっての

っ！

そうして本日の花嫁―（？）修業は筋トレ全十種を百回、十セツトとダッシュ二百本で終了した。

花嫁修業七日目。

本日も鬼のような監視の元、しっかりと体を動かしたあたしたちは部屋に戻ってのんびりと過ごしていた。

そしてそんなあたしの退屈をいい意味でも悪い意味でもはらしてくれるのが奏音である。

「なんか詩音、最近前より綺麗になっただね」

「ん？」

突然そんな事を言っただけでこっちを見つめてくる奏音。普通自分より顔のいい奴に言われたら嫌味にしか聞こえないが、奏音の場合それが嫌味に聞こえない。それがあたしには不思議でならなかった。学校のクラスメートはみんな「奏音ちゃんにそう言ってもらえると自信がでる」と喜んでいた。

「まあ修業してるからねー。それに奏音だって前より綺麗になってるよ」

前から雑誌にとりあげられるほどだった奏音の美貌は、今や神々しいまでに進化していた。目の色が変わってしまったあたしが言える事じゃないけど、まさに人外の美しさだ。それにどことなく音波さんにも似てきている。

「ふふ、ありがとう。やっぱり毎日の運動のおかげかな」

あ、これはお世辞ぐらいにしかとらえてないな。奏音は昔から綺麗だの、かわいいだのと言われ続けているのに自分の容姿については疎い。所謂無自覚ってやつだ。

「筋トレかー」

そもそもなぜ筋トレをするのかだが、妖怪としての体に慣れるためだそうだ。腕力や脚力が飛躍的に上がってしまった今、異界のものとは頑丈に出来ているからまだしも、むこうの世界で力の加減を間違えると取り返しのつかない事になる。試しに音波さんが持つてきてくれたむこうの世界で作られた木人形をデコピンしてみたら木端微塵に碎け散った。あれが生きてる人間だったらと思うと言葉も出ない。

その驚異的な力は妖気からくるものらしいので、筋トレしていれば自然と力の抑え方を学べるそうだ。音波さんに言わせれば一石二

鳥、あたしから言わせてもらえば日常生活に修行を取り入れたほうが断然いい気がする。たとえば屋敷の廊下を雑巾がけとか。

それにしても最近肌の調子がよくなった気がする。確かに運動する事で代謝がよくなりデトックス効果があるのかもしれないが、そもそも汗をかかない妖怪に老廃物を出すような機能が備わっているのかすら怪しい。

第一、妖怪というのも人間がつけた俗称で、ヒトのように種が決まっているわけではない。極端な話、異界からしてみたら自分たちが人間でむこうの世界の人間が妖怪なのだ。

さらに生物というのは無数に起こる化学反応の総和でできている。水を飲まず、食べ物をお口にしない、つまり栄養を摂取しないあたしたちは生物に該当するのかどうか。

今の段階ではわからない事ばかりなので考える事を早々に放棄した。いくら時間はあるとはいえ、考えても答えの出ない事に頭を使うほど知的好奇心にあふれているわけじゃない。

「その辺は妖怪の神秘って事でいいんじゃないの？」

「そうだね。その方が夢があって素敵なのかも」

素敵かどうかは置いといて、やはり奏音の順応性は高いと思う。

この一週間とちょっとでもう自分が人間ではない事を受け入れ、修業に励んでいた。

天然恐るべし。

花嫁修業十日目。

いつもの筋トレを終えたところで音波さんから集合の合図がかかった。

「今日から次の段階に入るわ」

短く言い放つと音波さんは両手を二回、パン、パンと叩く。すると木製の引き戸がさつと開き、見知った人物とその陰に隠れるようにして一人の女性が入ってきた。

「源藏さん！」

「真咲さん?!」

「久しぶりね、二人とも」

むこうでも普段から和服の源藏さんは、今日は驚色うつくしの着流し姿。その後ろからひょっこり現れたのは無地の朱色の着物を着た真咲さんだった。

「びっくりしちゃった？」

真咲さんがここにいる事は聞かされていた。でも、まさかこのタイミングで会うとは思ってもみなかったので驚きを隠せない。そんなあたしたちを見て真咲さんは目を細めた。

真咲さんはあたしたちが中学に上がるちょっと前まで神社で巫女さんをしていた人で、暇をみつけてはよく面倒を見てくれていた。そしてあたしたちに巫女さんになるよう薦めたのは他でもない真咲さんである。

「はいはい積もる話は後、今は修業に専念して」

久しぶりの再会に浸ろうかと口を少し開いたところで音波さんの制止の声がかかった。奏音は立ち上がりうとしていたみたいで、そつと姿勢を正す。源藏さんたちは音波さんの横に座った。

「今日から運動の後にこれをやってもらうわ」

音波さんがこれと言って扇でさしたのは、源藏さんたちが持つてきていた引越して使うような大きなダンボール。その中から一つ真咲さんが取り出したのは、

「卵？」

スーパーで売られているような一パック十個入りの卵。それがあのダンボールいっぱいに入ってるのかと思うと、総額おいくらなのか気になるのである。

「今日からは午前中は運動、午後からはひたすら卵を割る。以上始め！」

そうして真咲さんに渡されたのはダンボール一箱と鉄製のボール、白い割烹着だった。寝間着が汚れては困るので大人しく割烹着を身に着けていると、真咲さんが手伝ってくれた。地味に紐を結ぶのは大変だったりするのでありがたい。

「頑張つてね」

優しいお声をかけてもらい、俄然やる気になったあたしはダンボールから卵を取り出そうと手に取った。

「あ」

何気なく掴んだだけなのに、卵はパックに入っただけで見るも無残に割れてしまった。

そういえばと、木人形にデコピンした時の事が頭に思い出される。ちらっと奏音の方を見るとあたしと同じようにパックから中身を滴らせ、呆然と自分の手を眺めていた。

たかが卵を割るだけだと思っていたが、これは考えを改めなくてはならないようだ。

結局、その日あたしが卵をパックから取り出すことはなかった。

花嫁修業 参

花嫁修業十五日目。

あれからなんとかパックから卵を取り出せるようになったものの、肝心の割る作業は未だできていなかった。自分ではボールの縁にコンコンと軽く叩いているつもりなんだが、どうも力が強すぎるみたいでそのまま割れてしまう。ひどい時は持っただけでなんてこともあった。

そうして鬼（音波さん）に叱咤され、ようやく修業が終わった頃にはストレスが溜まっていた。

そんな中、いつもなら修業が終わると部屋に直行するのだが、今日は奏音がどうしても言うので音波さんと三人で雑談タイムになだれ込んだ。

「お母さんと明日良、お父さんはいつ結婚したの？」

ここ最近はずっと音波さんと共に過ごしていたため奏音はもう、お母さんと詰まらずに呼べるようになっていた。しかしあれから一度も顔を合わせていない明日良さんの事はまだムリなようだ。

音波さんもそんな奏音を見て微笑ましそうにしている。たまにあたしを見て悲しそうにする事もあるが、あたしはそれにあえて気づかないふりをしていた。

「そうねー、今からだいたい二百年くらい前だったかしら」

妖怪の寿命は平均で千年くらいなので、むこうで言う二百年は二十年にあたる。そのためこちらではあまり年齢や時間というものに関心がないんだそう。その中できつちり十八年数えていた音波さんたちには頭が上がらない。

他人の恋愛話が好きな奏音は二人の出会いについて聞いていた。

「私たちが出会ったのはそれから二十年くらい前の話よ」

「その時の事聞きたい！」

二十年ということは、二年くらいって事だからむこうで言えばわりと早めだな。

黒髪の中からちらりとのぞく耳は赤く色づいていて、なかなか話そうとしない音波さんに奏音はなおも食い下がる。すると、諦めた音波さんは「明日良には内緒よ」と当時の事を照れくさそうに語ってくれた。

「私は当時、自分の力がどの程度通用するのか知りたくて各地を転々としていたのよ。そしてある時、たまたま原初の国に立ち寄ったら、十年に一度行われる武闘大会の開催国になっていて、急遽それに飛び入り参加したわけ」

「うんうん！」

力試しに各地を転々……似合いすぎててつつこめないのが悔しい。

「もちろんこの私がそこら辺の連中に負けるはずもなく、順調に決勝まで勝ち進んだわ。そしてその決勝の相手が――」

「明日良さんだったんでしょ」

音波さんはその通りだと頷いてみせた。奏音は「少女漫画みたい！ー」ときゃーきゃー言っていたが、あたしはその戦って友情や愛を育むよくあるパターンに少々がっかりしていた。もっと想像を絶するようなアグレッシブなのがよかった。

「それでね、二人ともちよつと本気を出しすぎちゃって闘技場は半壊、死者は幸いでなかったものの怪我人多数、更に私たちの戦いに当てられた帝七人が乱入してそれはもう大変な騒ぎになったのよ。帝と拳を突き合わせるなんてなかなか出来る事じゃないから凄く楽しかったわ、あれはいい思い出ね」

出会いはべたでもやってる事は意外と過激……

にしてもそのどこら辺に楽しさを見いだせるのか、あたしには到底理解できるとは思えなかった。しかも思い出って……そういうのは普通、消しさりたい過去とか黒歴史と言うんじゃないかなるか。

ちらつと左隣を見れば目を輝かせて「人が入り乱れる中お父さんと拳で愛を深め合ったなんて、素敵！」と悶えている。奏音は殊更恋愛が絡むと周りが見えなくなるのだ。妹としては姉の行く末がかなり心配である。

「それがきっかけで出会った私たちは互いの力を認め合い、付き合いうまでに然程時間はかからなかった。でも付き合ったその後が大変だったのよ」

「大変ってどんな風に？」

帝と肩を並べられる力を持っている音波さんなら多少の困難などものもしないだろうに。むしろ二人に意見できる人なんているのだろうか。

あたしたちはその音波さんには似つかわしくない言葉に興味津々だった。

「私たちが付き合う事に周囲はあまりいい顔をしなかった。特に先代の妻、あんたたちの祖母なんかは私の事を殺そうとまでしたのよ」

いくら末っ子の息子がかわいいからってその彼女を殺そうとするとは穏やかでない。隣では奏音が信じられないとばかりに呆然と首を振っていた。

そんな奏音を見て音波さんは苦笑いを浮かべ、その理由を語る。

「私には帝と肩を並べる力はあるとしても、帝と肩を並べられる身分じゃなかったの。私と源藏は陰の国のとある小さな村の貧しい家に生まれてね、始帝の息子である明日良はおいそれと口を利けるような相手じゃなかったのよ」

なるほど、身分違いの恋というやつですね。ちらっと視界の端に身悶える影が映ったが、見なかったことにしよう。

「それでしまいには二人で駆け落ちするかって話になったんだけど、先代はとても寛大なお方でね。私たちがしたいようにしなさいって言って下さったのよ」

そう言った音波さんの目には先代始帝への尊敬と感謝の念が込められていた。

うん、賢帝と言われるだけあってお祖父さんは話のわかるいい人だったようだ。できれば会ってみたかった。

「で、晴れて恋人同士になった私たちは約二十年の月日をかけて結婚。その後激しい嫁姑問題が起こったのは言うまでもないわね」

ふうと一息つく音波さんはその当時の事を思い出したのか、げんなりとしていた。きつと凄まじいバトルを繰り広げていたに違いない。

音波さんもこう見えて苦労してきたんだなと奏音と二人、生温かい眼差しを向けているとそれに気づいた音波さんは「ありがとう」と言って涙を一つ零した。美人の涙は凄まじい破壊力だった。こんな見たら明日良さんじゃなくても瞬殺だね。

そうしてすぐに笑顔に戻った音波さんはまたしても爆弾を落としてくれた。

「心配しなくてもあんたたちは始帝の娘なんだから身分は十分よ。
それに嫁ぎ先の姑はもういないから安心しなさい」

若帝 壱

むこうの世界の季節は夏真っ盛り。原初の国の季節も夏真っ盛り。しかしこの部屋の空気は熱くて冷たい。

「嫁ぎ先ってどういう事なのか詳しく説明して」

最初に訪れたあの部屋で、あたしと奏音は明日良さんに詰め寄っていた。

事の発端は音波さんの「心配しなくてもあんたたちは始帝の娘なんだから身分は十分よ。それに嫁ぎ先の姑はもういないから安心しなさい」という台詞。

花嫁修業だなんてふざけて言っているだけだと思っていたあたしたちは、あれが冗談じゃなかったと知り、音波さんに明日良さんのところへ案内してもらった。

「奏音は地帝、詩音は炎帝の元に――」

「そんな事聞いているんじゃない！！　なんであたしたちが結婚するのかを聞いているのよっ！」

確かに結婚相手が誰なのかは気になるけども、それ以前になぜ結婚する事になっているのかが問題だ。

今にも掴み掛りそうなたしとは対照的に、明日良さんは涼しい顔で座るよう促した。その態度が余計ム力つくのだが、奏音に宥め

られて腰をおろす。たぶん寝間着じゃなかったらこの部屋はまた銀世界になっていただろう。

「お前らは嫁ぐ事前提に修業を受けていたのではないのか？」

不思議そうに聞いてくる明日良さんに、口を開けば暴言しか出てきそうになかった。ここは奏音に任せようとあたしはだんまりを決め込んだ。

「わたしたちが結婚する事になってたなんてさっき初めて知りました」

「その件については音波に一任していたのだが……」

あたしたちを案内してくれた音波さんはいつのまにか姿を消していた。全く気配を感じさせないとは見事としか言いようがない。明日良さんはあからさまに大きく息をついて額に手を触れる。

「大方言うのを忘れていたのであろう。いい機会だ、儂が話をしよう」

明日良さんが真面目な顔をしたので、自然とあたしたちも顔を引き締める。

死んだと思っていた親が実は生きていて、自分たちが人間じゃな

いと知り、その上結婚だなんてさすがに笑えない。ここはなんとかでも阻止しなくては。そのためにまずは話した。」

「儂が始帝になった訳は前に話したのである。」

「兄弟で争ったってやつですよ。」

明日良さんは無言で肯定し続きを話す。

「帝になる方法は二つ。一つは先代が次代を指名する方法、基本的にはこれが一般的だ。もう一つはなんらかの理由で帝が指名しなかった場合、他国の帝が先代と近いものの中から相応しいと思う者を推薦し審議する方法。儂の場合は後者だ。」

帝になる気がなかった明日良さんは、先代の息子だったからどこかの帝に推薦されたというわけか。なんとなく話が見えてきた。

「その時儂を推薦したのが現雷帝と闇帝、先代の地帝と炎帝の四人でな、儂が帝になると雷帝と地帝がお前たちをぜひうちの嫁に言うてきた。もちろん他の帝やそれに連なる者たちからもな。」

「それはつまり、わたしたちを政治の道具にするという事ですか？」

「そうではない。」

天然でいつも優しい奏音だが言う時は言う。あたしではなく奏音から言われると思っていなかったのだろう、明日良さんは軽く目を見開くと慌てて否定した。

しかし嫁ぎ先が代替わりしているらしいとはいえ、炎帝と地帝。明日良さんを帝にと推薦していたとなるとやはり政治の臭いがする。

「ようやく会えた娘を嫁に出してまで道具にしたがる父親がどこにいる。出来る事ならばお前らを一生嫁になど出しようはない」

「じゃあなんで……お父さんはわたしたちを嫁に出すの？」

不意にお父さんと呼ばれ明日良さんは一瞬間抜けな顔をしていたが、すぐに真面目な顔に戻る。たださつきと違って心なしか口元があがっているようにも見えた。

「お前たち、特に詩音を、帝の座をかけた腐った争いに巻き込まない為だ」

まさかそこで自分の名前が出てくるとは思っていなかったの、だんまりを決め込んだつもりがつい聞き返してしまっていた。

「なんであたし？」

帝に性別が関係ないのだとしても、あたしが始帝になる要素なんて何もな……くはないか。始帝はつまるところの氷帝で、それと同じ力を持つあたしには必然的に奏音よりも帝に近い位置にいる。明日良さんが先代みたいにつかり忘れる事はないだろうからそこはいいとして、もしも明日良さんの身に何かあった時にあたしは間違いない候補の一人に上がる。そうすると現在明日良さんの下についているらしい兄弟や他の側近が間違いなく接触してくるだろう。

無言で問いかけてくる明日良さんにこちらも無言で返す。会うの二回目なのにもうアイコンタクトができるんだから、つくづく親子なんだと思う。

しかし頭では理解できたがどこか釈然としない。

「だからって結婚は……」

ちょっと極端すぎる気がする。

それにあたしにはむこうに恋人だっているし。まあ最近受験もあってお互いすれ違い気味だったし、こっちに来てからは全然連絡とれてないしで、もうダメになってるかもしれないが。不満を隠そうともしないあたしに明日良さんは至極真面目で真摯な目を向けてきた。

「嫁に行けばお前は帝の妻として、よっぽどの事がない限り帝に推される事もないだろう。それに現在の炎帝と地帝は儼も音波もよく知る奴らでな、多少気難しかったり何を考えているのか分からなかったりするが悪い奴らではないから安心するといい」

そんなの聞いて誰が安心できるというのだろうか。しかも嫁に行く事前だし。

明日良さんといい音波さんといいこの人たちはみんな少し強引なようだ。親だからといっていきなり出てきて嫁に行けなんて横暴すぎる。

ここは一つ丁重にお断りしようと口を開きかけたところで、あたしよりも先に奏音が動いた。

「花嫁修業はこれからも受けさせてもらいます。でも、嫁に行くつもりはありません」

きつぱりと断った奏音。明日良さんは眉を顰めただけで何も言わない。

誰も口を利かないまま部屋には重い沈黙だけが続いた。さっきまで微笑ましい親子になっていたのには今は敵を見るような目でお互い出方を窺っている。

この重い空気をどうしたものかと考えていると、ありがたいことにさっきまで姿を消していた音波さんが現れた。

「詩音、部屋に戻るわよ」

「え……でも」

てっきりこの空気をどうにかしてくれるものとはかり思っていたから、最初言われた事が理解できなかった。わざわざ名指して部屋に戻るように言っただけで事は、奏音はここに残るという事だ。

ちらつと奏音の方を見るとそこにはいつものふんわり笑う姉の姿。

「先に戻ってて」

本人にそう言われてしまっではどうしようもないので、あたしは後ろ髪をひかれる思いで音波さんの後について部屋を出た。

異界には時計がないので正確な時間はわからないが、奏音が部屋に戻ってくるまではだいたい三十分くらいだった。

音波さんに連れてこられた奏音に特に変わった様子はみられない。

「二人で何話してたの？」

「うん。ちょっとね……」

めずらしく言葉を濁して奏音はあたしの前に正座した。大事な話をするつもりらしい。

あたしは柱に預けていた背を起こし、正座で奏音に向き合う。こうして奏音と二人で話をする日がくるとは思ってもみなかった。

「さっき明日良さんと話して、近いうちに一度会う事になったんだけど、詩音はどうする？」

「会うつて誰に？」

「結婚相手に」

「誰が？」

「わたしが」

「なんで？」

「会ってみたい、から？」

意味わかんない。さっき明日良さんにきつぱり断ったはずなのに、なんでいきなり会う事になってるの！？ しかも会う理由が疑問形だし、あたしがいなかったあの三十分に一体何があったんだ。

奏音は苦笑いを浮かべるだけで特に脅されたとかそいつた事はなさそうだ。てことはやはり本人の意思……？

返事をしないあたしに奏音は「詩音が嫌ならいいんだよ！？ わたし一人で会うから」と両手と首を小さく振った。しかしその目は来てほしいと物語っている。

そんなもの見せられたら断るわけにいかない。

「あたしも行く」

奏音は意外に言い出したら聞かない性格、所謂頑固者で、あたしが今ここで何を言っても聞く耳を持たないだろう。だったらせめて一人で相手と会わずんじやなくて、あたしも傍にいよう。その方が安心できる。

「ありがとう詩音！ 詩音ならそう言ってくれと思ったのっ」

そう言って奏音は満面の笑みを浮かべる。それだけで自分の選択は間違っていないと思えるが、「詩音ならそう言ってくれと思うってた」って……これ、確信犯とかじゃないよね？

ちらつと見た奏音は心ここに非ずと言った様子で鼻歌を歌っている。何がそこまで奏音をさせるのか、考えても答えは出なかった。

若帝 弐（前書き）

虹彩について不快に思われる表現があります。

若帝 貳

あれから一週間――

いつもと同じように修業を終えたあたしたちは屋敷の一番奥にある自分たちの部屋で、異界に来てから初となる着替えをした。

いや、それだちょっと語弊がある。正確には母である音波さんと、義理の叔母である真咲さんに着せ替え人形の如く遊ばれた。

「さすが私の子ね、二人ともとっても綺麗よ」

「ほんと見違えたわ」

あたしたちを見て目を細める二人はとても達成感に満ち溢れた顔をしていた。

そりやそうでしょうよ。二人があたしたちに合わせた着物の数は軽く百を越えていたんだから。それを一枚着せては二人でああでもないこうでもないかと頭を悩ませて、最後に残った着物が似合わないのであれば和服ではなく洋服を着る事をお勧めする。

長着が終われば次は帯、そして帯締め、最後に化粧。すべてが終わった頃にはあたしも奏音も精根尽きていた。化粧に一時間以上かけれる友達を初めて尊敬した。いつも遅いだなんだの言っでごめenne。

「二人とも何疲れた顔してんの、早くこっち来なさい」

誰のせいだ、誰の！！ 悪態をつく元気すらないあたしは心のただけに留め、音波さんに腕を引かれるままに部屋の奥にあった姿見の前に立たされた。

太ももの辺りまである烏の濡れ羽のような髪は香油のようなもののおかげで艶が増し、きつい目元はアイメイクで誤魔化され、唇にはしっかりグロスのようなものまで塗られていた。着物は淡いクリーム色に若竹の柄。帯は緋色、銀の帯締めは長く花のように結んで先は長めに残して前に垂らしている。

「詩音綺麗……」

隣から聞こえた声に体を向けると、いつも以上にかわいい奏音の姿。

濃い紫の着物に藤の花柄、黒の帯にあたしよりも短い銀の帯締め姿は奏音の落ち着いた雰囲気を前面に押し出していた。まさに大和撫子。

「奏音こそ」

ほんと、何を着ても似合うんだから羨ましい。

あたしたちは音波さんに止められるまでしばらくお互いに褒め合っていた。かわいいもの、綺麗なものを見れば自然とテンションが上がってくるのは女だから仕方がない。

「そろそろ時間かしらね。さあ、未来の旦那をあつと言わせに行く」

わよっ！」

なぜ結婚する事前提なのかはわからないが、旦那という言葉にさつきまで上がっていたテンションが一気に下がってしまった。あたしたちはこれからお見合いをしなくてはならないのだ。綺麗な着物に現をぬかしている場合ではない。

隣に顔を向けると、奏音があたしとは真逆の反応をしているのが見えた。どうして急に会うなんて言い出したのか、奏音は話してくれなかったからわからない。でもなんとなく、嫌な予感がする。

何かはわからないけど、漠然とそんな気がしてあたしは両手で着物の袖をきつく握りしめた。

音波さんと真咲さんについて行く形であたしと奏音は暗い廊下を歩いていた。思えば夜に屋敷を歩くのはこれで二回目。廊下の隅に等間隔に並べられている行燈。初めて屋敷に来た時、意味もなくあたしは行燈の数を数えていた。あれからまだ一月もたつてないのに、ひどく昔の事のように感じるのはあたしがこの世界に慣れてきた証拠なのだろうか。

暖かい光を時折ゆらりゆらりと揺らす行燈を見つめていると、そっと左手がとられた。それを目で追うとふんわり微笑む奏音と目が合う。

「どっ——」

「ついたわよ」

どうかしたのか、聞くつもりだった言葉は音波さんに奪われた。奏音は何も言わずもう一度微笑んでから手を放した。一分にも満たない時間だったけど、確かにあった温もりがなくなったのは少しだけ寂しい。すでに前を向いている奏音にならってあたしも前を見据えた。

「この先に東屋があるわ。もう相手は来てるから二人も早く行きなさい」

「お母さんたちは来てくれないの？」

「将来夫婦になる男女の逢瀬に親が入るなんて、そんな無粋なまねできるわけないでしょう。ほら、つべこべ言わずさっさと行きなさいっ！」

何か言おうとした奏音を制し、音波さんはあたしと奏音の背中を押して庭に追い出した。どうやらあたしたちがちゃんと行くまでそこで見張っているつもりらしく、腰に手をあてて顎で行けと示していた。しゃくっつけていても美人なのがムカつく。

これ以上相手を待たせるわけにはいかないし、何よりこのままではらちが明かないと判断したのだろう。奏音は諦めたように一息つくどゆっくりと先へ進みだした。

「ほら、あんたも行きなさい」

「はいはい、言われなくても行きますよーだ」

後ろで「かわいくない」などと騒いでいたがあえて気にせず奏音の後を追った。かわいくないとか今更言われたって別になんとも思わないんだから。

奏音にはすぐ追いつく事ができて、隣を並んで歩く。二人の間に会話はなかったけど苦ではない。むしろ心地よかった。

正確には屋敷の庭だが、異界に来てから初めて外に出た。灯籠のような物は行燈と同じような時折ゆれる暖かい光で辺りを優しく照らしている。

「あ、見えてきたよ」

奏音が指さした方を見ると、中から明かりが灯る小さな建物があった。音波さんが言っていた東屋に間違いないだろう。そこは小池に囲まれた小島にあって橋を渡らなければ行けないところにあった。どんだけ広いんだこの屋敷……。

「どんな人なんだろうね」

傍目から見ても楽しみですといった感じの奏音。明日良さんの言っていた事なんて、きっと忘れているか最初から頭に入ってなかった

たのдарう。

『氣難しかったり何を考えているかわからない』

どっちがどうなのかはわからないが、めんどくさそうな相手なのは確かだと思う。

着々と近づく東屋に比例して足取りは重くなってきた。それでもここまで来て奏音を置いて引き返すなんてできるはずもなく、ついに橋を渡り切ってしまった。もう後戻りはできない。

後二メートルという距離まで近づいた時、縁の下から何かが勢いよく飛び出してきた。

「きゃあああつ!？」

「な、なにっ!？」

突然の事に悲鳴をあげる奏音を引き寄せ背に隠す。飛び出してきた何かはすぐに茂みに入ってしまったのでわからなかった。

「へー、肝は据わってるみてえだが……それって女としてどうよ。まだ悲鳴あげてる方が可愛げがある」

「止せ」

いつのまにそこにいたのか、東屋の前には二つの人影があった。逆光で顔は見えないが声はれっきとした男のもので、二人が誰なのかすぐに見当がつく。

「帝……」

二人はあたしたちを無視してなにやら言い争いをはじめてしまっていた。いきなり出てきたかと思っただけなら自分たちの世界に入ってしまったなんて信じられない。しかもかなり失礼な事を言われたし。

だいたい落ち着いてきた奏音の背中を撫でながらこの場をどうしようか考えていると、ガサガサと茂みが揺れる。さっき何かが飛び込んだ場所だ。

帝たちは相変わらず騒いでいて気付いていないのか、役に立ちそうもない。あたしは奏音と顔を見合わせ、小さく頷いてお互いの意思を確認し、じりじりと茂みに近づいていく。

——ガサガサガサッ！！

近づくにつれて揺れは一段と強くなる。隣では奏音が緊張した面持ちで、いつでも対処できるように両手を前に構えていた。

（いくよ？）

（う、うん！）

後十センチってところまで手を伸ばしたところで、何かは急に飛び出してきた。妖怪仕様の目は視力もよくなるばかりか夜目も少し効くようになっていたので飛び出してきた何かは月の光で輝く銀色だったのがわかった。

「きゃっ!!」

——ボフツ

奏音目掛けて飛び出した銀の生物は反射的に繰り出された平手をもろに受け、未だに騒いでいた帝の前にボトリとおちた。それにはさすがに二人も気づいたらしく何事だと銀色の生物に目をやっている。

奏音は突然の事とはいえ、びっくりともしない生物に慌てふためいていた。そんな奏音を宥めながら近くへ行くと、その生物がなんなのかがわかった。

「虎の……」

「赤ちゃん……」

「……」

「……」

「……」

「……」

外で立ち話もあれなんでととりあえず東屋に入ったのはいいが、誰も喋らないので空気が重い。それに約一名は負のオーラを纏ってさつきからずっと俯いている。

あたしはそんな空気にため息をついて、膝の上で寝ている（気絶している）虎の赤ん坊を撫でながら観察していた。

全体的に少し薄汚れてはいるが、ちよつと硬い毛は白に近い銀色で虎特有の黒い縞模様があつた。思いのほか肉球が柔らかくふにふにしている。気持ちいい。むこうで言うホワイトタイガーや白虎といった感じのこの虎は、背の高い方の帝曰く銀虎という神獣の子供で異界でも滅多にお目にかかる事のできない稀少生物らしい。その稀少生物がなんで屋敷にいたのかは疑問に残るが、迷い込んだのだからという事で一先ず保留。

肉球をぐりぐりしながら奏音を見ると、不可抗力とはいえ動物、しかも赤ん坊に手を上げてしまったことにひどく落ち込んでいた。叩いた時の音もパチンとかペチンみたいなかわいいのではなくサンドバックを殴った時のような鈍い音がしてたからたぶん無意識で力を使っただろう。それについても悔やんでいるようだ。

「奏音元気だしなよ。あれは事故、この子だってちゃんと生きてるんだからさ」

皮肉にも奏音が護身術を齧っていたおかげで、反射的に動いた手も綺麗に入り銀虎が血を吐いたりするような事は起きなかった。これがあたしだったら力が暴発して今頃辺り一面銀世界へと化し銀虎はもちろん帝や奏音にも被害が出ていたかもしれない。これぞまさに不幸中の幸いである。

そうしてしばらく奏音に言葉をかけ続けて、励ますことに成功したあたしは達成感にも似た安堵を抱き帝の二人にようやくしっかりと目を向けた。

一人は身長二メートル近くありそうな敵つい男。もう一人は長身瘦躯の目つきの悪い男。最初に口を開いたのはでかい方だった。

「遅くなったが……俺が地帝の大地だ。よろしく頼む」

地帝こと大地さんは短く刈った暗めの茶髪に琥珀色の瞳が印象的な敵つい系の強面イケメンだった。臍脂の長着に濃い藍色の袴姿で、低めの声といい落ち着いた大人の印象を受ける。

奏音がそれに応えるように軽く会釈したのもしやこの人は、と思ったところでもう一人が口を開いた。

「オレは炎帝、雷臥^{らいが}。で、どっちが妹だ？」

雷臥と名乗った炎帝は、行燈の光で輝く金髪を襟足の二房だけ鎖骨の辺りまで長くして後は短くするという少々奇抜な髪形をしていた。セミロングのウルフを極端にした感じといえばわかりやすいだ

ろうか。眉間に縦線を入れて睨むようにしてこちらを不躰に見るのは血のように赤い瞳。日本人がカラコンでしたら違和感あるだろうが、この男は文句なしに似合っている。大地さんとは違い黒の着流し姿で、品のある不良のようだ。

「あたしだけど」

品定めするようにじろじろと見てくる男に不快感を抱かないはずがなく、あたしは一心に男の赤い目を見つめる。そうして視線がぶつかると、睨み合いが始まった。

赤い瞳は見慣れないせいで少し不気味だが、視線を外せば負ける気がしてひたすら睨み続ける。すると、雷臥は口の端を吊り上げ不敵に笑んだ。

背筋がぞつとするような笑みを向けられ、これはまずいと頭の中で警鐘が鳴り響く。杞憂であってくれと願うあたしの心とは裏腹に、雷臥はさもご機嫌だと言わんばかりに口にした。

「この話、オレは受ける気にいる。せいぜい楽しませてくれよ、詩音」

名前の部分だけやけに艶っぽく言うあたり性質の悪さがうかがえる。雷臥は笑みを浮かべたまま胡坐をかいた足に肘をついてこっちの反応を見ているだけで、もう何も言うつもりはないらしい。だったらそのまま黙って貰おうとあたしは膝の上の銀虎をわしゃわしゃしながら奏音と大地さんの話を聞いていた。

それは屋敷から明日良さんが迎えに来るまで続き、その間雷臥が

口を開く事も銀虎が目を覚ます事も一度もなかった。

奏音

翌日。修業を終えたあたしと奏音は武道場で音波さんと真咲さんを合わせた四人で話しをしていた。武道場はこうして時折女の園と化する。

「それで、二人とも御感想は？」

はじめは修業の事など何気ない会話をして、いい頃合いを見計らったようにあの話題が出てきた。どうせそんな事だろうとあらかじめ予想していたあたしは視線だけを大人二人に向ける。にやにやと人の悪い顔をしている音波さん。真咲さんは顔には出していないものの興味津々といった様子だ。一方奏音の方はと言うと、なんのこともわかっていないらしく首を傾げている。

「どうもこうも、あんな男ありえないから」

あたしは今朝目を覚ました銀虎改めギンをバンザイさせて遊ぶ。本当は野生に帰すつもりだったが、なぜかあたしに懐いてしまったためこの屋敷で飼う事になった。

ガウガウ言いながら口を半開きになっているアホ面のどの辺が神獣なのかわからないが、かわいいから許す。

「向こうはそうは思っていないみたいでけど。後、雷臥は少し気難しい所はあるけどなんといつてもあの顔だし力も強いからかなりいい線いってると思っわよ」

「おまけに在位一年目の齡九十八。傀儡政治にはもってこいの相手だからね」

さらつとんでもない事を言う真咲さんにあたしも奏音も思わずフリーズする。言った張本人は素知らぬ顔で雷臥の恋愛遍歴について音波さんと話していた。なぜ二人がそこまで知っているのかはこの際どうでもいい。

（あれって政略結婚じゃないんだよね？）

（お父さんは違うつて言ってたよ。帝に嫁がせるのは後継から外すためと、外からうるさく言われないためだつて）

（つまり帝を利用しようつて事ね）

（それともまた少し違うみたいだけど、詳しくはわからなかったの）

「何こそこそ言ってるの」

奏音と小声で話していると、さっきまで真咲さんと話しこんでいたはずの音波さんの顔が近くにあった。慌ててなんでもないと言げると、音波さんは意味ありげに相槌を打って元の場所に戻る。

まったく油断も隙もあつたものではないと一息ついたところで、

ギンが手にじゃれ付いてきた。意外に柔らかい肉球は、パンチされてもふにふにするだけで痛くも痒くもない。むしろ小さな手をぴーんと伸ばす姿に癒される。

ギンで和んでいると、音波さんはこれ以上進展なしと思ったのか話の矛先を奏音に移した。

「それで奏音はどうだったの？ 大地の方もあんたに気があるみたいな事言ってたわよ」

身体全身で驚きを表現した奏音はタコのように耳まで赤くしている。初々しい乙女な反応に、大人の女性二人は顔を見合わせニヤリと口元に弧を描いた。さしずめか弱い赤ずきんを狙う狼二匹と言ったところか。

「奏音ちゃん、なんで赤くなるのかなー？」

「もしかしてもしかすると、あれなのかな？」

二人の攻めにおろおろと視線を彷徨わせる奏音。「あ」とか「え」とか落ち着きなく言いよどむのでは相手の嗜虐心に火を付けるだけなのに、と言ってる傍から二人にじりじりと詰め寄られていく。ふと助けを求める黒の双眸と目があつたが、実はあたしも気になっていたのでギンに戯れるようにして気付かなかったふりをした。追い詰められた奏音は最後には洗いざらいすべてを白状した。言い終わった時には目尻にうつすら涙を浮かべていて、ちよつとエロかった。あたしが男なら今頃前屈みでトイレに駆け込み……これ以

上はやめとこつ。

「つまり、屋敷で迷っているところを助けてもらって」

「これはもしや恋かと思い確認のために顔合わせをして」

「好きだと気付いたわけか」

「あうー……はい」

音波さん、真咲さん、あたしの三コンボで責められた奏音は相変わらず顔を赤くしたまま頷く。そうさせているのが自分だと思うと背徳感のようなものを感じ、危うくそっちの世界にいつてしまいうだ。しかも双子の姉だから近親相姦……シャレにならない。

今まで人の恋愛ばかりを追ってきた奏音について好きな人ができた。相手は自分の結婚相手として紹介された男で、むこうからもし返事をもらっている。

妹として祝福して応援してあげたい気持ちもあるが、一番近くにいた存在を取られるようでちょっと複雑だ。そんな妹心を察してくれたのか、ギンが立ち上がった顔の周りを舐めてくる。ちよつとざらざらして痛かったけど、獣臭くはなかった。やはり神獣と言われるだけはある。

頭を撫でて小さく「ありがとう」と言えば、紫の目をぱちぱちさせて首を傾げた後に元氣よく吠えた。ほんとかわいいな！。

あたしがギンに癒されている間、奏音は音波さんたちにあれこれ聞かれていた。途中何度も助けを求められたのだが、狼と化した二人を止めるのはあたしでは無理そうなので、とりあえず合掌してギ

ンと戯れる事に専念する。

「ギンも大きくなったら女には気をつけなよー」

「ガル？」

その夜、あたしと奏音はいつもの部屋でまったり過ごしていた。最初こそ奏音を警戒していたギンも危害を加えないとわかったのか、今は奏音の膝の上で寝息をたてている。

たぶん大丈夫だろうけど一応声を抑えてあたしたちは今日の事を話していた。

「好きになった相手が結婚相手だなんて少女漫画みたいだね」

まさか自分がそんな事になるとは思ってたと言っ奏音は照れているような嬉しんでいるような、恋する乙女の顔をしてギンの背を撫でていた。その優しい手つきにギンは口をむにやむにやさせている。美女と幼虎、絵になるわー。

そこであたしはずっと気になっていた事を思い切ってぶつけてみた。このまま何もしないのはダメな気がしたのだ。

「奏音は大地さんの事が好きなんだよね？」

自分でもストレートすぎるとは思ってたけど、他にふさわしい言葉が見つからなくてそのまま口にした。奏音は一瞬で茹ダコになると、口をもごもごさせる。そしてしばらくすると意を決したように頷いて見せた。それでもやっぱり恥ずかしいのか、ギンを撫でる手はそのままにこちらに顔を向ける事はなかった。

奏音とは反対側の壁にもたれて座っていたあたしは「よっこらせ」と少し年寄り臭い事を口にしつつ立ち上がる。向けられる視線をつれたまま奏音の隣に腰をおろした。

「毎回言っほど年寄りじゃない」

その視線に含まれた意味を察して先手を打つ。すると奏音はクスクスと久しぶりに見る大和撫子スマイルを披露してくれた。

肩が触れ合いそうな至近距離で、あたしはギンをじっと見つめる。時々ぴくりと跳ねる四本の足。ギンは今どんな夢を見ているのだろうか。

「どんな夢見てるのかなあ」

自分と同じ事を考えていたらしい奏音に自然と笑みが浮かぶ。あたしがそれに「走ってるんでしょ」と答えると、奏音は「今度は打たれなければいいけど」と小さく笑う。まだちょっと気にしている

らしい奏音は「ごめんね」とギンの頭を撫でた。
ギンから視線を上げないまま、あたしは一番聞きたかった事を尋ねた。

「行くの？」

どこになんて言わない。それでも何が言いたいのか奏音ならわかるはずだから。

奏音は一瞬だけ撫でる手を止め、またすぐに動かした。部屋にはギンのすーすーという寝息だけが響いている。
重い沈黙、けれど息苦しくはない。いつかは来ると覚悟していたものがノックもなしに訪れた瞬間。

「うっん、行かな——！？」

ぎゅっと音がするんじゃないかって思うほど、あたしは奏音を力強く抱きしめた。

お風呂なんか入ってないのに、香水なんかつけてないのに香る、香油とは違ってお日さまのような香り。どこから香るんだよ、なんて思っ反面奏音だからなって変に納得する自分もいる。

「詩音？ どうしたの？」

突然抱きつかれて少しだけ慌てる奏音。それでも無意識に突き放

すんじゃなくて、しつかり受け止めてくれるところが奏音らしい。
困惑気味に回された奏音の腕は、ギンにしていたようにあたしの背を優しくなでた。

「行つていいんだよ。奏音が行きたいところへ、どこへだって行つていいんだよ」

あたしには奏音が行かないって言う事がわかってた。本当は行きたいって思ってるくせに、あたしを一人にできない、姉として妹を置いて自分だけ幸せにはなれないって変な義務感にも似た感情が邪魔をしている。

あたしだって本当は奏音にここにいてほしい。でも、それと同時に奏音にはいつも笑っていてほしい。あたしの事は気にせず、自由にどこへでも飛んで行ってほしい。

奏音が息を飲んだのがわかった。背中に回された腕は微かにだが震えている。肩に顔を埋めているからわからないが、きつと目を忙しくあちこち泳がしているだろう姿が安易に想像できた。

「奏音は今までずっとあたしを見てきてくれた。いっぱい、いっぱい、あたしにしてくれた」

毎日朝早くにお弁当を作つて、毎日一生懸命源藏さんの手伝いをして、毎日欠かさず洗濯や掃除をして、その合間に勉強も運動も陰で人一倍努力して、あたしが辛い時はいつも傍にいて励ましてくれた。周りがあたしと奏音を比べると、奏音はいつだって誰にだって抗議していた。いつもあたしを守ってくれていた。あたしに幸せを

くれた。

「だからもう、いいんだよ」

びくりと大げさなくらい体を跳ねさせて、奏音は恐る恐るといった様子で口にした。自分はもう必要ないのかと。

「今までありがとう、奏音。これからはあたしの姉としてではなく、奏音という一人の人として生きて。それに、奏音はいつだってあたしの大好きで大事なお姉ちゃんだよ。だから――」

だからこそ幸せになってほしい。誰よりも、たとえそのせいで不幸になる人がいたとしても、あたしは奏音の幸せだけを願う。

背中にした腕に力を入れると、同じだけの力を返してくれる。その締め付けは、苦しいのに苦しくない。暖かくて、心地よくて、子供が母親にすぎるように背中に回す手で奏音の寝間着を固く掴んだ。肌触りのいい生地に、お日さまの香り、奏音の体温、すべてがあたしを包んでくれる。

「幸せになつてっ」

耳元で小さくても強くはつきりと言ったつもりだったのに、実際に声に出たのはひどく情けないものだった。それでもちゃんと届いたのは、きつと相手が奏音だったから。

回された腕は強く、けれど優しく、苦しくなく、暖かくて、悲しかった、嬉しかった。

「うん、うんっ」

「あたしは大丈夫だから、ここには明日良さ……お父さんもお母さんもいるからっ、これから自分のために生きて、お姉ちゃんっ！」

決壊した涙腺からあふれ出る雫は途切れる事を知らない。あたしの肩口も奏音の肩口も、きつと涙でびしょびしょ。寝間着もしわだらけで紐も解れかかっている。

それでもあたしたちはお互いを求めた。あたしたちは双子だから、悲しみは二人で分け合って昇華する。

あたしたちは双子で姉妹で、二人で一つに見られる事もあれば、全く別のものに見られる事もある。この関係からは一生逃げられない、逃げようとも思わない。けれど今日、あたしたちは親のいない双子の“姉”と“妹”の鎖からは外れる事ができた。

その事を知るのはゆらゆら揺れる行燈の灯りと、部屋の隅であたしたちを映し出す大きな姿見、そしてあの時と同じように部屋の外の二つの気配だけ。入ってくればいいのに、入ってあたしたちを抱きしめてくれればいいのに、あの二人はそれができない。そういうところはあたしじゃなくて奏音と一緒にいたいだ。

母と子 壱

後日、奏音は明日良さんたちに嫁に行きたいと自分から申し出て、相手側に正式に連絡を入れたところ、むこうからも是非にと返事が返ってきた。

そうして奏音は一月後、地の国へと行く事が決まった。この一月という期間は双方話し合いの結果、奏音の修業のためと銘打っては、あるが実際は家族との別れを惜しむ時間として明日良さんが権力をフルに使ってもぎ取ったものだった。

「はっ！」

威勢のいいかけ声に顔を上げると、少し離れたところに奏音が立っているのが見えた。そこから二メートルほど離れた場所では腕組みをした音波さんが何か一言二言口にしている。それに返事をした奏音は腕を前に構え、勢いよく駆け出した。

奏音はあれから以前にもまして修業に打ち込み、妖気を抑える事もだいぶできるようになった。今は力の制御の仕方を実践して音波さんに指導してもらっている。真正正銘の花嫁修業になってからの奏音の成長には目を見張るものがあった。

「奏音は頑張っておるようだな。愛の力は偉大という事か」

軽く鳥肌が立ちそうな台詞を恥ずかしげもなく言つてのけた美丈夫にあたしは軽く眩暈を覚えた。「お前も負けてはおれんな」と優しい声色で促されあたしは自分の目の前に置かれているお椀に向きなかつた。中にはなんの変哲もない水が八分目あたりまで注がれている。

「大事なのは集中と、凧いだ心だ」

そつと右手を前に出して、目をつむる。黒い背景に赤いお椀。その中に入っている水が氷るイメージで突き出された手から目には見えない妖気を放出す――

「おーす」

「っ!？」

突然の来訪者に集中が切れた。その反動でイメージは霧散し、妖気はどばつと出てしまう。目を開ければその無残な結果、お椀を中心に直径一メートルほどの天井まで伸びた氷柱が視界に入った。

また失敗。これで十一回目……

「相変わらず救いようがねえ下手さだな」

「誰のせいだと思つてんのよっ!！」

振り向いた先、武道場の入り口では壁にもたれるようにして男が立っていた。腕を組んで口元をつりあげるさまは憎たらしいっただけじゃない。

修業の第三段階に入ったあたしは明日良さん指導の下、お椀に入った水だけを凍らせるという事をしていた。これが簡単そうに見えて難しく、ちよつとのミスで氷柱を作ってしまう。なんでも自分で氷を作りだすよりも、自然に存在するものに干渉する方が難しいらしい。

「自分の低能さを他人のせいにするじゃねえよ」

男、雷臥は鼻で笑うと組んでいた手を解き、右手を軽く振った。その途端に後ろからゴオオっという音とともに熱風が身体をいたずらに撫でる。

炎帝の力は火。あたしの力……ううん、あたし自身と相性最悪な男。その傲慢で上から目線のこの男はなぜかあの日からこの屋敷に頻繁に顔を出す。理由を聞くと決まって「火の国と原初の国の国交をよくするため」と答えるのだが、彼が実際にやっているのはあたしの修業の邪魔だけで、明日良さんと何か深刻そうに話している姿は見た事がない。ほんと、こんなのが帝で国民がかわいそうだ。

「せっかく溶かしてやったんだ。さっさと再開したらどうだ？」

別に頼んでない、なんて言うほど子供ではないが、お礼を言ってるつもりも毛頭ない。これは彼が勝手にやった事であって、あた

しには関係のない事だ。

相変わらずの人をバカにしているような笑みを浮かべる男をさつと視界から外してお椀に向かう。お椀の中には水が入っていて、焼けた痕跡もない。

腐っても炎帝という事が……。

後ろからは「おもしろくねえ」と不満そうに漏らされた言葉が聞こえた。どうせ頼んでないとも言ったんだろう。人をバカにするのも大概にしろってのっ！

苛々した気分のまま再開された修業は一向に成果を見せず、横からちゃちゃを入れてくる奴もいたせいで今までで一番の氷柱が輝き、今日の修業は終わった。

そうしていつもならすぐに部屋に戻るところを今日は、なぜか雷臥とあの庭にある東屋へと来ていた。あの時は夜だったしギンの事もあって庭なんか見る余裕はなかったが、こうして改めて見ると手入れの行き届いた素敵な庭園だ。

「ギンっ！ あんま遠くに行くなよっ」

雷臥の声と時間差で、視界に小さな虎が駆けて行くのが入った。毎日奏音が念入りにブラッシングする銀色の毛並は陽の光に当たってキラキラと輝いている。最近はまだ部屋と武道場の行ったり来た

りで、赤ん坊のギンには窮屈だったのかもしれない。今が好機とばかりに庭を縦横無尽に駆け回っていた。

手すりから乗り出すようにしてギンの姿を追っていると、さっきまで少し暑くすら思っていた陽の光がなくなった。

「姉貴は大地のところへ行くらしいな」

すぐ近くから聞こえた声に顔を向けると、隣で雷臥があたしと同じように手すりから身体を少しだけ乗り出していた。前に向けられた目はきよろきよろと忙しく動いていて、ギンを追っているのだとすぐにわかる。

あたしも倣ってまたギンへと視線を戻す。ギンは体を低くしてそろりそろりと背後から虫に近づいていく。

「反対しなかったのか？」

「するわけないでしょ」

即答した事にか、それとも反対しなかった事にか、雷臥は少し意外そうに目を瞠る。あたしはそれを一瞥するだけで、鮮やかすぎる赤から庭の緑へと視線を移した。

そこではギンがちょうど虫に飛び掛かったところだった。蜻蛉のよな虫は苦も無くギンから逃れ、逆にギンをゆらゆらと弄ぶ。

「奏音には好きな事を好きなだけやってもらいたいの。あたしの事

なんかは二の次で、自分の幸せを一番に考えてほしい」

「ふーん……姉妹愛ってやつか」

感慨深そうに何度か頷いた雷臥は「オレにはわかんねえな」とぼつりと呟いた。

「あんたには兄弟いないの？」

「兄貴と姉貴がいる」

なんとなくそんな気はしてたがやっぱり末っ子だったか。きっと大事に育てられてきたんだろうな。じゃないとこんな性格にはならないだろうし。

最近の彼とのやり取りを思い出すだけで自然と頭にくる。これは最早彼の一種の才能なのかもしれない。

「仲悪いの？」

「別に」

その割には顔が嫌そうに歪んでるんだけど、本人は気づいているのだろうか。どうやら兄弟仲はあまり良好とはいえないらしい。

「歳は離れてるの？」

「あー、兄貴が二百後半で姉貴がちょうど二百だったかな」

「へ、へーそうなんだー」

「おう」

とりあえず当たり障りのない会話でもと思ったのはいいが、向こうとしては時間の感覚が違うのをすっかり忘れていた。二百という年月が長いのか短いのか、よくわからないせいで話しは自然とそこで途切れてしまう。

お互いに何も喋らないまま時間だけが過ぎていく。

ギンも疲れたのか、いつのまにか植木の影で長くなっていた。

「お前はどうすんだ？」

「どうするって、何が？」

気まずい沈黙を突き破ってくれたのは嬉しい。しかしその質問はちよつと唐突すぎる気がする。それじゃ何が言いたいのかわからないでしょうに。

顔を向ければ呆れたと言わんばかりにため息をつかれる。え、あたしが悪いの？

「姉貴は大地のところへ嫁に行く事になった。で、お前はこれから

どうすんだよ。オレんどこに来るか？」

「へ？」

なんでもない風に、それこそ友達に「今日泊まりに来る？」みたいにさらりと言われ、つい間抜けな声を出してしまった。

そんなあたしの反応に、雷臥はまだよく理解していないと思ったのだろう。もう一度、今度はかなり丁寧に言葉を選んでくれた。

「姉が嫁に行く事になったんだ。いい機会だと思ってお前もオレのところに嫁にこないか？」

「行くわけないでしょ。だいたいあたしにはむこうに恋人がいるの。それにあたしは好きでもない男のところへ嫁に行くつもりはないから。だいたいあんただってあたしの事好きでもないくせに——」

「オレがお前を惚れさせてやる」

「はあ？ あ、あんた何言って——」

「人間だろうが妖怪だろうが、お前の目にオレ以外映らねえようにしてやるよ」

一際強い風が向かい合うあたしたちの間を走り抜けた。風に舞うあたしの黒と雷臥の金。

虫の声も、水のせせらぎも、一瞬で遠いものとなって、雷臥という男にすべてを持って行かれた。その端正な顔には自信に満ち溢れ

た笑みが浮かび、血というには鮮やかすぎる赤い双眸は鈍い光を放
っていた。

？

母と子 貳

「それで、詩音はなんて答えたの？」

「ちよつ、奏音っ。近過ぎっ！！」

本当に目と鼻の先。後数センチで唇がぶつかるんじゃないかと思うほどの距離に奏音はいた。最初は大人しく向かい合って座っていただけだったのに、いつのまにか四つん這いのように身を乗り出して、気づけばこの距離。恋愛トークに目がないのはわかったから、少し距離を置いていただけると助かる。

窘めれば奏音は小さく謝って身を引いた。姉妹でキスは回避できたが、それでも近い。真っ向から見据える黒曜石は、まるで玩具を前にした子供のように輝いていた。

「別に何も」

「何もって、雷臥さんは告白したようなものののに詩音は何も言わなかったのっ!？」

信じられない、と言わんばかりに目を瞋る奏音を前にあたしは盛大に眉を顰めた。

それに気づいた奏音は一気に冷静さを取り戻し居住まいを正す。そしてそのわけを目だけで促してきた。

「あれは告白なんかじゃない……」

あの時の彼の目は真剣だった。その容姿も相まって、不覚にもドキッとしてしまうほどに。きっと、あの顔であの言葉を言われたら、女の子の九割はコロツと彼におちるだろう。あたしも少しだけグラツときた。

でも、それもほんの一瞬の事。あたしは騙されない。雷臥はあたしの事を好きでも嫌いでもない。それ以前に人とも思っていないだろう。彼にとってあたしは、単なる暇つぶしの玩具のようにしか映っていないのだ。

「詩音？」

下げていた顔を上げれば訝しそうに眉を寄せる奏音が見えた。頭のいい奏音の事だ、何か不穏な空気でも感じたのだろう、何か言いたそうにしては口を閉じて、を繰り返している。

何度も口を開けたり閉めたりする様はまるで金魚のよう。だからこの変な空気を壊すためにわざと口にして言ってみる。

「金魚みたいになってるよ」

奏音は頬を赤くすると、さっと手で口を隠した。その目には羞恥でうつすら涙が浮かんでいる。こんなの見たら間違いなく男の理性

は切れる。いくら真面目そうな大地さんでもこれは手を出さずには
いられないだろう。むしろこれで手を出さない男がいたならあたし
はそいつの男としての本能を疑う。

「いい奏音、相手がいくら好きな男だったとしても嫌な時はちゃんと嫌って言うのよ。初めては痛いっていう人もいるぐむっ!!」

「わーわーわーっ！ 詩音ったらいきなり何言いだすの!？」

顔をこれ以上ないくらいに真っ赤にした奏音に口を塞がれ、その後続くはずだった言葉は全部手の中に吸い込まれた。しかも無意識に力を使っているらしく、白魚のような手からは想像もつかない馬鹿力で押さえられ顔の骨が軋む音がした。

「んーん ーんんっ!!」

今出せる渾身の力でタップすると奏音は本当に「はっ!？」と声に出して手を放してくれた。しきりに「大丈夫」、「ごめん」を繰り返す奏音に軽く手を上げて応える。ご丁寧に鼻まで一緒に押さえてくれていたから息ができなかったのだ。

「……ふー」

「ほんとごめんね。詩音が急にあんな事言うからつい……っ」

荒い呼吸も落ち着きようやく一息ついたところで、奏音はもう一度頭を下げた。本当にすまなそうに眉を下げて瞳を潤す姿は、なぜかこっちが悪者になった気がしてしまう。

あたしはさっきの騒動で床に転がり落ちたギンをもう一度膝の上に乗せた。結構勢いがあつたにも関わらず、すぴーと寝息をたてるのはさすが神獣とっていいのか、それとも単なる間抜けなのか。恐らく後者であろう。

「もういいって。あたしもちょっと急だったし」

まあ、まさかあんなにも過剰に反応するとは思ってもみなかったけど、と心の中で付け足して今度はちゃんと奏音に向き合う。

一見ただの下ネタのようだが、あたしたちにとってこれは実に重大な問題である。ここは異界で、向こうの世界の常識はここでは通用しない。現にあたしはすでに生理を迎えていいはずなのにまったくその兆候がみられない。

「でもね、奏音。あたしたちはもう人間じゃないから今までの常識は通用しない。だからこそ、この事ははっきりさせた方がいいと思う」

あたしたちはまだ十八歳。それもごく最近本来の姿に戻ったばかりのペーペー。そんなあたしたちが母親になるにはまだ身も心も早すぎると思う。

意図するところがわかると、奏音は恥ずかしがる事も慌てる事も

なかった。

どちらからともなく腰を上げ、部屋を出た。廊下には行燈が等間隔に並べられている。夜でもネオンで明るい街、スイッチ一つで部屋中を照らす照明を当たり前のように目にしていたから最初は慣れなかった行燈も今では全くと言っていいほど苦にならない。逆に趣があつていいとすら思うほどには気に入っていた。

異界にもむこうと一緒に四季があり、だいたい周期も一緒なんだそうだと。もっとも、異界の住民は暑さ、寒さをほとんど感じないため冷暖房器具は存在しない。毎年冷え性で悩まされていたあたしには嬉しい限りだ。

音波さんの部屋とあたしたちの部屋はそう遠くない。ちょっと考え事をしていればあつという間につく。

「お母さん。入ってもいい？」

部屋の外から奏音が声をかけると、中から間延びした返事が返ってきた。これが天下の始帝のお妃様だと思つと威厳も何もあつたものじゃない。

奏音に続く形で部屋に入る。この部屋に来たのは片手で足りくらいだが、いつ見ても殺風景としかいいようがない。まあ、異界の人たちは質素な物を好む傾向が強く、着物も成人式できるような柄物は数が少なかったし、音波さんは元々身一つで旅をするような人だからこの方が合っているのだろうが……いかんせん部屋が広い寂しく感じる。

「あんたたちねー、せっかく可愛く生んであげたんだからそんな難しい面しないの」

可愛く生まれたのは奏音だけだと思うけど……って、そんなことはともかく置いて、今は音波さんに聞かなければいけない事がある。

「この世界での妊娠や避妊について教えて」

回りくどいのはあまり好きではない。それにあたしの座右の銘は聞くは一時の恥、聞かぬは一生の恥だ。
隣に立つ奏音は気恥ずかしそうに、着物の袖を握ったり放したりしている。

「そろそろ来る頃だと思ってはいたけど、なんの恥じらいもなく言われるとは思ってもみなかったわ」

どうせあたしは奏音みたいな乙女じゃないですよ。経験はないにしてもそれ相応の知識はあるし、友達の中にはもう初体験を済ませている子だっている。そればかりか中学時代に仲がよかった子にはもう子供ができたとすら聞いた。むしろ奏音のような乙女の方が珍しいだろう。

音波さんは脇息に預けていた体を起こすと、居住まいを正してあたしたちに座るように促した。音波さんから見て右に奏音が、左にあたしが腰を下すと、音波さんは口を開く。

「子供はね、光の鳥が運んでくるのよ」

「コウノトリ……」

広い部屋にぽつりと奏音の声が響いた。

コウノトリ……それはつまり、むこうでもヨーロッパで広く伝わる伝承の事でしょうか。あの、沼から子連れて来るとかタライに入れて運んで来るとか煙突から投げ入れるとかいう。

「そう来たか……」

確かにここは異界で、あたしたちの常識が通用しない事はもう嫌という程理解している。だから今回もあたしたちには想像もつかないような方法で子供をつくるんだろうと思っていた。そう思っていたがために、誰もが一度は耳にするような言葉に反動は大きかった。

「あんたたち光の鳥の事知ってるの？」

知っているも何も、小さい子に夜の営みで生まれるなんて言えるはずもなく、コウノトリ伝説は暗黙の了解のようになっている。現にあたしも奏音も小さい頃に源藏さん、真咲さんにそう説明された……。

「源藏さんたち本当の事言ってたんだね」

「みたいね」

苦笑いを浮かべる奏音に同じく苦笑いを浮かべる。

もしかしてむこうで言うコウノトリ伝説つてのは妖怪同様ここからむこうに伝わったものなのだろうか。でもそれだと何故日本ではなくヨーロッパ？ こちらの言語はどう考えても日本語なのにどうやってむこうに伝えたのだろうか。

「ちょっと詩音、あんた聞ってるの？」

「え？ あ、ごめんなさい」

考え事をしている間にも音波さんはコウノトリについて話をしてくれていたらしい。その美しい顔にしわを刻み、大きく息をつくど、釘を刺してから昔語りのように話し始めた。

母と子 参

音波さんの話で、コウノトリは光の鳥と書くらしい事がわかった。そして子供を作るのに際して行為をするのは異界でも同じらしい。光の鳥が現れた日に、互いの妖気を分かち合う事で子を授かるんだそう。

光の鳥についてはかなり昔から調べてはいるらしいが、一向にその成果は上げられておらず、すべては光の鳥次第。夫婦になって三日で光の鳥を見るものもいれば、数百年かかるものもいるとか。

「光の鳥はね、それは美しい鳥なのよ。ひとたび羽を羽ばたかせれば光の欠片が宙を舞い、長い尾羽は極彩色の輝き放って……。奏音も早く見れるといいわね」

当時の事を思い出したのだろう音波さんは色っぽく一息つくと、身を乗り出すようにして話を聞いていた奏音に笑みを向けた。対する奏音は音がするんじゃないかと思う勢いでポツと顔を赤くして俯いてしまう。長い黒髪から覗く耳は、まるで茹蛸のように真っ赤に染まっていた。

音波さんはそれを見えますます笑みを深くする。本当に愛おしそうに、そしてどこか寂しそうに。

そう思っただけとした。あたしはごく当たり前の事を忘れていた。音波さんは——母親、なんだよね。

部屋に戻ると、奏音はすぐに寝てしまった。その横ではギンがお腹を出して寝ている。

こうやって奏音の寝顔をじっくり見るのはいつぶりだろうか。小さい頃は同じ布団で寝ていたから見飽きるくらい見ていたのに。

「幸せそうな顔しちゃって」

あたしが今まで見てきたなかで一番かわいい寝顔。きっとこれから先の幸せな未来を思い浮かべているのだろう。

布団から出ていた腕を、起こさないように注意しながらそっと中に入れる。するとそれに応えるように小さく笑った。

「まったく、少しはあたしにも分けてよね」

顔にかかっていた前髪を流して、あたしは軽くはない腰を上げた。音をたてないように開けた戸からは、闇夜を照らす月の光がずっと射し込む。

チロチロと何かはわからない虫が鳴いてた。遠くでなのか、近くでなのか、まだよく区別はつかないけれど、確かに聞こえる。

雲一つない夜空に浮かぶ丸い月。その周りには散りばめられたいくつもの星。

「満月か……、あたしは三日月の方が好きだな」

後ろ手にそつと戸を閉め、少し前に通ったばかりの廊下を進む。奏音と話をしていればあつという間の距離も一人では少し、長く感じた。

最後の角を曲がったところ、部屋の中にいると思っていた人物は縁側に座って月を見上げていた。

月に照らされる音波さんは妖艶な美しさを身に纏っていた。この美しさを前にしては、どんな言葉も陳腐なものになってしまうのだろつ。

「こつ月が綺麗だと、どうしてもお酒がすすんで困るのよね」

近くまで行くと、音波さんは肩をすくめて見せた。横には飲み終わったと思われるとつくりが無造作に並べられている。その数およそ十五、一升瓶と同じくらいの量を飲んでいる事になる。

そついえば最初に会った時、音波さんは一升瓶片手に現れたつけ。そしてその瓶で源藏さんを殴ったのだ。

「あんたたちを迎えに行つた時もお酒を持っていたのよ。飲んでみる？」

隣に腰を下すと間を置かずに杯が目の前に出された。中にはお酒

がなみなみと注がれていて今にも零れそうだ。

「あたしはまだ未成年なの」

「それは、むこうの世界の話でしょう。こつちでは十八で成人だからあんたはもう大人の仲間入りをしてるわよ」

寿命が長い分てつきり成人する歳も遅いと思っていたのだが、どうやら違うみたいだ。

音波さんは言葉に詰まったあたしを見て、今が好機とばかりにすすめてくる。それでも断り続けていたのだが、最終的に「郷に入れば郷に従え」と半ば無理矢理渡されてしまった。

手の中に納まる杯と無言の圧力をかけてくる音波さんとを交互に見やり、諦めにも似た決心がついた。本当はあまりお酒は好きではないのだが、異界のお酒がどのようなものなのか試してみるのもいい経験だろう。

「いい詩音、こういうのは一気に呷ってなんぼだからね」

わかってるよそんな事。だてに源藏さんの晩酌に付き合っていないの。内心ちよつとした皮肉を言いながら、杯に口をつけ一気に呷る。

「っ……ゴホッゲホッ、」

これ、きつつ！！ かつと喉が焼けるように熱くなって咽ていると、音波さん背を擦ってくれた。その手つきは奏音と同じで、どこか懐かしいような気もした。赤ん坊の頃の記憶、なのかな。

だいぶ落ち着きを取り戻して礼を言おうと隣に顔を向けると、音波さんはなぜかそっぽを向いていた。体も小刻みに震えている。何かを我慢しているようにも見えるそれがなんのか、あたしが理解するのと音波さんが噴出したのは同時だった。

ひいひいと息も絶え絶えに悶える音波さんを自分でも自覚する冷めた目で見ていると、それに気づいた音波さんは今度はクスクスと上品に笑みを浮かべる。あ、これも奏音と同じだ。

「ふふ、明日良も最初これを飲んだ時は咽てたのよ。ちょうど今の詩音みたいだね」

明日良さんはお酒強そうに見えたからちょっと意外だ。毎日二人でお酒飲んでそうなのに。誰が見ても美男美女と言っだろう二人が一緒にお酒を飲む姿……うん、絵になる。そこに奏音が加わったらもう言う事はないだろう。

完璧な美形家族の様子を思い浮かべていると、左手が柔らかく温かいものに包まれた。

「詩音は私じゃなく、明日良に似ているわね」

「まあ、目の色は明日良さんと同じだし」

あたしの目は明日良さんと同じ銀色だ。髪は同じ黒でもあたしのはどちらかと言えば音波さんよりだ。それに目の色で能力がある程度わかる異界では、強く印象に残るのはやはり目の方だろう。

そう言つと音波さんは手の力を強くした。

「確かに詩音の目は明日良とよく似てる。でも、私が言ってるのはそんな誰にでもわかるところじゃないわ」

今朝会ったばかりの明日良さんを思い浮かべてみる。……目と髪以外で似てるとこなんて思いつかない。

「こついつのは自分ではわからないものよ。どうしても気になるなら源藏や真咲にでも聞いてみなさい」

源藏さんと真咲さんか……そう言えば源藏さんとは最近会ってないな。真咲さんとは修業の時とかにちよくちよく話しているけど。

とりあえず、明日良さんの事はいったん忘れて、ここに来た本来の目的を果たす事にしよう。

「ねえ音波さん、音波さんは奏音が大地さんのところへ行くのを決めた時どう思った？」

「憎かったわ」

「に、憎い？」

自分たちから結婚の話を持ち出しといて何が憎いと言うのだろう。明日良さんはあたしたちを守るためと言っていたが、この結婚には図らずとも政治的な意味がある。音波さんたちからしたら奏音の結婚は、一石二鳥ではないか。

親心から寂しく思ったとしても、奏音本人が大地さんを慕っているのだから諸手を上げて喜ぶべきだろう。

「ええ。私は私が憎い。あんなたちをこんな形でしか守ってあげられない己の無力さ。あんなたちに面と向かって話す事ができなかった弱さ。奏音の、娘の幸せを素直に喜べない汚さ。私はそんな自分が許せない」

月を見上げる音波さんの顔には自嘲的な笑みが浮かんでいる。

夜空に浮かぶ満月はそんな音波さんを容赦なく照らし出していた。

「ねえ音波さん、あたし思うんだけど。世界には、どうにかできる事よりも、どうしようもできない事の方が多いんじゃないかなって」

小さい頃、あたしたちがいくら望んでも両親は現れなかった。いくら頑張っても、パイ以外で奏音には勝てなかった。いくら嫌がっても、周りはあたしたちを比べ続けた。

川に落ちた葉はどんなに抗おうとも流れに逆らう事はできない。それはきつと、あたしたちも同じ事だ。

「だからさ、そんな思い詰めた顔しないでよ。音波さんらしくないよ？」

この一か月であたしが知った音波さんは、いつも全力で、ちょっと強引だけど優しく、奏音と同じ天然なのに頭が良いって事。

そこに今日新しく加わったのは、娘の事で苦悩する母親という事。

「ほら笑って。笑ってる方が……お母さん、らしいから」

これでもかかってくらい目を瞠る音波さんを見ると、つい顔に血が集まってくる。あの時は障子越しだったし、それどころではなかったから平気だった。でも、こうして面と向かって言うのはどうしても恥ずかしいものがある。

赤い顔を見られなくてそっぽを向くと、音波さんから声を押し殺したような笑い声が聞こえてきた。ちらっと目だけ向けると、音波さんは笑っていた。白い頬には何本もの筋があるけれど、それでもしっかりと笑っていた。

一時帰宅

ある日の晩、修業を終えたあたしと奏音は例の大部屋にいた。

「むこうに行っているの？」

「思えばお前たちは身一つでここに来たからな、何か持ってきたい物があるなら持ってくるといい」

明日良さんには珍しく、口元には笑みが浮かんでいた。と言ってもほんのわずかに口角があがっただけだが。

目に見えて喜ぶ奏音を見ると、自然とあたしも嬉しくなってくる。やっと念願のむこうの世界に帰れるのだ。

これで友達にも連絡できる。そう思った矢先、明日良さんから思いもよらない言葉がきた。

「ただし、むこうの世界の人間との接触は許さぬ。人目につかぬよう、行くのは今日の深夜だ」

「ちょっと待ってよ、それって連絡もとっちゃダメって事!？」

「無論。それが出来ぬのならこの話はなしだ」

反論しようとしたのに、釘を刺されてしまった。

笑みは消え、代わりに鋭い目で睨むようにあたしと対峙する。本気のような。

渋々頷くと、満足そうに「うむ」なんて言って部屋を出て行った。

「詩音……」

心配そうにこちらを窺う奏音に、自分でも情けないと思う笑みを向けた。奏音は何か言いたそうにしていたが、あえてそれには気づかないふりをした。

せつかく、話せると思ったのに……

部屋の中にはなんとも言えない重い空気が渦巻いていた。

深夜。

あたしと奏音は真咲さんと一緒に銅鏡が置かれている部屋に来ていた。相変わらず白い床はぴかぴかで、やっぱり薄らとあたしを映し出していた。

ここが、あたしたちが異界で初めて見た世界。時間としてはまだそんなに経ってないのにあの時がひどく懐かしく感じる。

「さてと、二人とも準備はいい？」

銅鏡の前に立って顔だけ向ける真咲さんにあたしも奏音も頷いた。もうすぐあの家へ帰れる、そう思うと心臓が大きく跳ねた。手持無沙汰だった手は自然と奏音と繋がれ、あたしは目を閉じる。こうしないと目が焼けるかもしれないからって、さすがに奏音ももう大丈夫よね……

瞼を閉じていてもわかる強い光。白かった視界が徐々に黒へと姿を変える。

古くなった畳の臭いに目を開ければ、そこは神社の本殿だった。

「待っていたぞ」

源藏さんは暗闇の中なのに明かりも持たず立っていた。いくら人目につかないようにって言ってもさすがに灯りぐらいは持った方がいいと思う。これじゃ完璧不審者でしょ。

「ちよつと奏音、大丈夫？　ほんと音波さんにそっくりね」

「だ、大丈夫ですっ」

やっぱりか……。どうせそうなるだろうと薄々思っていたさ。これがお約束ってやつだもんね。

あたしは握られていた手を放して、源藏さんの横に並んだ。

「久しぶりだな」

「はい。源藏さんはこっちに残って銅鏡の管理をしてるんだよね。真咲さんと一緒に居られなくて寂しくないの？」

ちよつとした悪戯心と言うのだろうか、あたしなりのスキンシップとしてそんな事を言ってみた。きっと源藏さんは照れて小言を言うんだろうと思ったからだ。

しかしそんなあたしの予想は外れ、

「ああ。俺も早く異界に帰って真咲とのんびりしたいと常々考えている」

まじめに真剣に応えてくれた。

そこであたしは気づいたのだ。この人は我が母音波の実の弟であり、我が姉奏音の叔父なのだ。

そうこうしているうちに、奏音もすっかり元気になって早速家に入ることになった。男の一人暮らしと言うのは部屋が汚いイメージがあったのだが、家の中は驚くほど綺麗だった。綺麗と言うより生活感が全くと言っていいほどしない。

「源藏さんちゃんとご飯食べてるんですか？」

疑問に思った奏音が心配そうに尋ねると、当の本人は「ああ」と変に納得して説明してくれた。

「俺は人間じゃないからな、飯を食わなくても死にはしない。それに自分で作っても奏音や真咲のように上手くはないからな」

「あらやだ、源藏ったら。帰ってきたら何か作ってあげるわね」

二人が自分たちの世界に入ってしまったため、あたしと奏音は各自二階にある自分の部屋へと向かった。

久しぶりに入った自分の部屋は、家具の上に薄く埃が積もってる以外特に変わりはなかった。

何を持っていくか考えた結果、ジャージなどの動きやすい服を数着と、アルバム、雑誌なんかの本を大きめのドラムバッグに詰め込んだ。

隣からは度々大きな音がしているから、奏音はまだ荷物をまとめている途中なのだろう。

「ふう……」

部屋の隅に置いてあるベッドに体を投げ出すと、ドサツと音がし

て埃が舞った。

その時ベッドヘッドに置かれていた携帯が鳴った。この着うたは、メールだ。仰向けのまま手を伸ばして、やっこの思いで開く。

「うわぁ……何これ」

着信件数、メールの件数、すべてがカンスト。しかもその大半が彼氏からの物だった。

拓哉からしたら、あたしは何の連絡もせずになくなったんだよね……。不可抗力だったとはいえ、あたしのした事は最低だ。さっき来たばかりの新しいメールも、拓哉からだった。

「拓哉……」

メールには「学校で待ってる」と書かれていた。毎日一通ずつ、きつと受験勉強で忙しい合間をぬって送っているのだろう。着信履歴にも同じ名前がずらりと並んでいる。

考える余裕なんてなかった。あたしはそれが当たり前のように、通話ボタンまで指を滑らす。これを押せば――

「何をしている」

「っ!？」

いつからいたのだろう。部屋の前には源藏さんが立っていた。その眼光は鋭く、身動き一つ許してくれない。

源藏さんはゆっくりと近づいてくると、あたしの手から携帯を奪った。場の空気とは逆に携帯はパタンと軽快な音を経て閉じられた。

「何をしようとしていた」

「電話を、かけようと」

「藤崎拓哉、にか」

「なんで知って……」

源藏さんに、拓哉と付き合っている事は話してなかった。むこうでも拓哉の名前は出してはいないはず。奏音が言っただとも考えられない。

「あの男ならここに来た」

閉じた携帯を見ながら、源藏さんはその時の事を話してくれた。

「お前たちが異界に行って一週間たったぐらいか、あの男は連絡が取れなくなった事を心配して級友と共にここに来た。そこであいつらはお前と、奏音の事を聞いてきた。今どうしているのか、とな」

「それで、なんて答えたの？」

「二人は今、母方の祖母の所へと里帰りをしている。連絡がつかないのは俺にはわからない」

里帰り、か。あながち間違っではない。拓哉はそれで毎日メールしてたのか。そういえば、「元気か」とか「いつ帰ってくる」とか書かれていたメールもあった。

だったらなお更、連絡しないといけない。ううん、直接会って謝らないと。

「あの男に会いに行こうなんて馬鹿な事は考えるな……お前たちは今日、死んだんだ」

「あたしたちが、死んだ……？」

出鼻をくじかれた事よりも、源藏さんの言った言葉が頭の中を支配した。死んだって、どういう事？

視線を彷徨わせた先に、壁に掛けられていたカレンダーがあった。二十五日に赤い丸がされ、その下に小さく始業式と書かれている。

「お前たちは今日の正午過ぎ、祖母の家から帰る途中に事故にあい、病院に運ぶ暇なくその場で息を引き取った。俺は事が落ち着くと、姪を失った悲しみから隠居する。ここには代わりの者が遣されるだろっ」

「そんな……っ」

あたしはもう二度と、拓哉にも、友達にも会えないって事？　これから先、ずっとむこうで暮らせて事？

「すべては十八年前、お前たちがここに来る時に既に決まっていた事だ。お前たちの物も事が落ち着けばすべて燃やす。大事な物は持つて行け。その為に今、お前たちはここにいます」

真っ白になった頭の中と真っ暗になった目の前。

源藏さんが部屋を出てから奏音が来るまで、しばらくあたしはそのまま立ち尽くしていた。

三日月（前書き）

話の途中に一部、詩音から奏音に視点変更します。

三日月

奏音の嫁入りまで後一週間となった頃、あたしたちは音波さんの部屋に呼ばれていた。

「二人に紹介したい人がいるのよ、真咲」

音波さんが声をかけると、真咲さんは一度部屋から出て行き、二人の女の人を連れて戻って来た。

真咲さんたちはあたしたちよりも下座に腰を下ろした。

「この二人は私の娘で、」

真咲さんが少し顔を向けると、二人は名前を口にした。

「姉の真紀まきと申します」

「妹の咲紀さきと申します」

真紀さんは源藏さんと同じ色の黒い髪を後ろで一つに括り、真咲さんと同じブラウンの目をした知的な感じ。一方の咲紀さんは真咲

さんと同じ、焦げ茶色のショートカットで二人よりも明るいブラウンの目の、明るそうな人。

天然とクールなんて言われるあたしたち姉妹とは逆かな。

失礼にならない程度に二人を観察していると、今まで傍観していた音波さんが口を開いた。

「今日から真紀には奏音の、咲紀には詩音の、護衛も兼ねた侍女になつてもらふ事になったから、何かあれば二人に言いなさい。もちろん私たちに言つてもいいからね」

「これも、十八年前から決められてた事？」

そう言つた音波さんに、あたしはつい思つた事を口に出してしまつた。

音波さんはもちろん、真咲さんも奏音もこの前の事を知っている。真紀さんたちはどうか知らないが、部屋の空気は確実に悪くなった。言つつもりはなかったとしても、思つていた事は事実だし、言つてしまった言葉は取り消す事はできない。

「失礼します」

あたしはその場に居たくなって腰を上げた。

障子に手をかけたところで、音波さんが質問に答えてくれた。

「そうよ。真紀と咲紀はあんたたちが生まれたその瞬間ときから、あん

「あたしに仕える事が決まったわ」

あたしはそれに応える事なく、そのまま部屋を後にした。

詩音がなくなった部屋には、気まずい沈黙が流れていた。お母さんも真咲さんも、真紀さんたちも何も言わない。

こっそり真咲さんに聞いた話では、大きな問題もなく事は進んで源藏さんも明後日辺り帰ってくる事が決まったらしい。それから、拓哉君も家に来たって聞いた。

拓哉君との事、かなり気にしているみたいだった。詩音はあまり人前で泣いたりしないため込んでうタイプだから心配だけど……。

「いい奏音、あの事は詩音には話してはダメよ。知れば詩音はもっと辛いはずだわ」

その事はお母さんと、真咲さんに固く口止めされていた。

お母さんは悲痛な表情で「知らない方が良い事もあるのよ」と、まるで自分に言い聞かせるように言う。

でも……わたしは、知っておいた方が良い事もあると思う。

この事で、みんな少なからず心を痛めてるって事を。

「なんでこんなところに来たんだろ……」

ただその場に居たくない一心で、たどり着いたのはあの東屋だった。

正直あまりいい思い出のないこの場所だが、風の音や草花の匂いは嫌いじゃない。周りを囲む池は夕日に照らされ、キラキラと輝いていた。波がないのが残念だ。

「詩音さま」

誰かが近づいてくるのは気配でなんとなくわかっていたから、そのまま振り返る。そこにはさっき紹介してもらったばかりの、咲紀さんが立っていた。

「改めまして、今日より詩音さまの侍女をさせていた——」

「咲紀さんでしょ、ちゃんと聞いてたよ。どうせ長い付き合いになるんだろうしさ、堅苦しいのはなし」

ちよつと感じ悪かったかもしれないけど、さつきも似たようなものだったしいか。

「よろしいのですか？」

そんな事を言われると思ってなかったのか、きよんとする咲紀さんは最初に見た時の印象通りだ。

頷いて見せると咲紀さんは「わかりました」と礼をし、さつきよりも少しだけ間延びした感じで「わたしの事は咲紀と呼んでくださいね」と言った。

あたしは立っているのは辛いだろうからと、椅子の隣を勧めてみた。咲紀はそれに「失礼します」と一声かけてから腰を下す。

「拓哉の話、聞いた？」

「はい。……母から聞きました」

やっぱり知ってたか。みんな心配そうな視線を送ってたもんね。

あの時、音波さんが一瞬だけ悲しそうな顔をしたのはあたしは見逃さなかった。見たくなかったのに。

「あたし、正直言って拓哉の事そんなに好きだっと思った事なかったの。付き合ってたのだって、告白されたからだっかし」

咲紀は無言で話を聞いてくれる。だからあたしは、言わなくてもいいようなことまで延々と話し続けた。

気づけば太陽はすっかり沈んでいた。

「でも、いつのまにかあたし、拓哉の事ちゃんと好きになってたみたい」

気づいた時にはすでに別れていた。なんて、奏音の好きな少女漫画のヒロインと同じ事を想う日が来るとは……。人生とはなんと数奇なものだろう。

ぼやける視界で空を見た。こうすれば涙は零れないだろうから。

「明日は晴れだね……。っ、星がいっぱい出てる」

「はい。雲一つない、いい天気になると思いますよ」

咲紀と並んで見た夜空には、たくさんの星が輝いていた。月にあたしの、拓哉の好きの三日月だった。

『星がいっぱい出てるぞ。明日は晴れだな』

明日にはきつと晴れる。

だから今日は、雨が降っても大丈夫だよな？

結婚前日

あれから六日。特に問題もなく事は進み、明日はとうとう奏音の嫁入りの日になった。

段取りとしては婚姻の儀と呼ばれる結婚式のようなものをこの屋敷の本邸で行い、その後町を練り歩く、所謂パレードを行う事になっていた。

「奏音様！ 言う事をお聞きくださいっ！！」

「お風呂くらい自分で入れますっ」

「いいえ、これは仕来りなのです。大人しくお縄についてくださいませっ！！」

「絶対嫌です！」

目の前で激しい攻防を繰り返す奏音とその侍女の真紀さん。ふたりはかれこれ小一時間ほど同じ事を言っては追いかっこをしていた。

あたしと咲紀はそれを部屋の隅でお茶を飲みながら見ている。

「奏音さまってお強いんですねー。いつもふんわりした感じなのでかなり意外です」

「あー、奏音は普段おつとりしてるけど実は運動神経いいからね」

体育祭のリレーなんかは必ずアンカーだったし、たまに運動部の子たちから助っ人頼まれてたなあ。あの時が懐かしいよ。

あたしが学生時代を思い返してるうちに、二人はどこかへ走って行ってしまった。

「また行っちゃいましたよ」

「そのうち戻ってくるでしょ。あ、お茶もう一杯もらえる？」

無駄のない動きで湯呑を受け取ると咲紀は部屋から出て行った。

異界にはケトルがないからその場ですぐに淹れられないのが不便だ。

誰もいなくなった部屋でひとり、これからの事を考えていた。

明日の結婚式には両国の要人はもちろん、他の国から何人かくるらしい。主役は奏音と大地さんとはいえ、存在すら疑われていたあたしも少なからず注目を浴びるだろう。幸いパレードには参加しなくてもいいらしい。大勢の人の前に出て、比べられるなんてたまつたもんじゃない。

でも本当は、

「あたしも見たいなあ」

「何が見たいって？」

「うひゃあっ!？」

突然声をかけられ驚きのあまり変な声が出てしまった。慌てて顔を向ければ、そこにはしたり顔の金髪男の姿。

「色気ねえなあ。そこはきやああ！　って叫ぶもんだろ」

「うっさいわね、きもい声出さないでよ」

高いのか低いのか、かすれて割れた声を聞かされて悪寒が走った。第一そんな事をするようなキヤラには見えないのに。

こっちはきもいと言う言葉はないのか、雷臥はしきりに首を傾げながらあたしの目の前に腰を下した。なぜ座る……そしてなぜあたしの湯呑を持っている。

「ん、お前の侍女から預かった。まったく、帝を使うとは胆の太え女もいたもんだ」

「……ありがとう」

受け取った湯呑に口をつけながら、目の前の男を注意深く観察している。目があつた。お互い何も言わずにそのまましていると、遠くからバタバタと廊下を走る音が聞こえてきた。足音はだんだんと近づいてくる。

一番最初に部屋に飛び込んできたのはもちろん奏音で、すぐ後に

真紀さん、その後に咲紀、音波さん、真咲さんの順に続く。いつのまにこんな大所帯に……しかも後ろ三人は明らかに楽しんでる。

「なんの騒ぎだ？」

「あー実は――」

あたしは雷臥に事の次第を話した。その間も奏音たちはわーわーと騒いでいて、一向に治まる気配がない。

そこで何を思ったのか、この男は急に立ち上がり妥協案とやらを述べたのだった。

仄かに香る木の匂い。濛々と立ちこめる白い湯気。むこうで言うところの檜風呂のような湯殿にあたしはいた。

「なんであたしが……」

長い長い黒髪を丁寧に丁寧に、それこそ壊れ物を扱うようにして洗う。異界では美しい髪が一種のステータスらしく、特に念を込めてしっかり洗うと言われた。

奏音は口では「ごめんね」と言いながらもどこことなく嬉しそうで、さつきから鼻歌を口ずさんでいる。

「一緒にお風呂に入るなんて久しぶりだね。いつ以来かなあ」

「あー、小学校の一、二年生の時以来じゃない？」

あの時はどつちが長く潜ってられるかよく競争していた。もちろん、全線全勝で奏音の勝ちに終わったけど。

手は動かしたまま昔の事を思い出していると、奏音が「懐かしいなあ」と呟いた。あたしはそれに「そうだね」と短く返事をした。

「あの時はこんな事になるなんて思ってもみなかった……」

「そうだね……」

死んだと思っていた両親は生きていた。しかも国のトップであたしたちは巫女さんからお姫様になって、自分たちが人間ではなく妖怪だった事を知った。

いきなり結婚しろ、って言われてイケメンのしかもこれまた国のトップとお見合いさせられた。拓哉とは何も話せないまま終わった。思えばこの二月はあたしたちの激動の日々と言っても過言ではないだろう。

「ねえ詩音……一人で大丈夫？ わたし、やっぱり……」

「今更お嫁に行けない、なんてのはなしだよ?」

そんな事言われたらなんのためにあの時涙まで流したのかわからない。奏音には幸せになってもらわなくては困る。

「それに、あたしは一人じゃないって言ったでしょ。ここには、なんかいろいろム力つくけど両親がいる。今はまだ許せないけど源藏さんもいるし、真咲さんだっているし、咲紀が傍にいてくれるからさ」

なんだかんだ言ってもあたしはみんなに囲まれている。何かあったら誰かが手を差し伸べてくれる。

あたしは奏音の背に目をやった。いつもより小さく見える。

「だから奏音は自分の心配だけしてなさい。真紀さんがいるって言っても、むこうで一人なんだから」

「わたしは……。うん、そうする」

「よろしい。にしても、まさか奏音に先越されちゃうとはなあ」

幸せになつて欲しかったのは嘘じゃない。奏音がお嫁に行くのは寂しいけど、それ以上に祝福の気持ちの方が大きい。

しかし、それとこれとは話が別だ。所詮恋愛物が好きな鈍感で天

然な奏音よりは先にと思っていたのが事実だ。

「わたしも、小さい頃から絶対詩音の白無垢かドレス姿を先に見る
と思つてた。詩音は男の人にモテてたし」

「……それ、間違つてもあたし以外に言わない方がいいよ」

これだから無自覚は嫌いだ。あたしが学年の男子ほぼ全員のメアドを知っていたのは、その大半が奏音の事を知るために近づいて来たからだつた。純粹な我が姉には一生かかっても理解できないだろうがな。

なんだか少しばかりムカついてきたので問答無用で後ろからだいぶ冷たくなつたお湯をかけてやつた。すると奏音はこれまたかわいらしい悲鳴をあげ、大胆にも反撃にでてきた。そこからはもちろん白熱したバトルが繰り広げられ、様子を見に来た真紀さんと咲紀を巻き込み、更にその後からやつて来た母二人をも加わつての大騒ぎとなつた。

奏音の独身最後の思い出として相応しかつたのかはわからなかったが、少なくともあたしの中には鮮明に、色濃く残る事は間違いないと思う。

結婚当日

結婚式当日。ついにこの日がやって来た。

奏音は朝から落ち着きがない様子だったが、今は大人しく別室で真紀さんと花嫁衣装の着付けに入っている。明日良さんと音波さんは既に着替えを済ませ、式をする本邸に行っているらしい。そしてあたしも咲紀によって着せ替え人形の如く着飾られていた。

「はい、できました!!」

部屋の奥にある姿見の前にそそくさと腕を引かれ、自分の姿を目にした。

始帝が治める原初の国のシンボルカラーである水色の振袖には扇とたぶん草の柄で、右の袖と裾は白にグラデーションしていた。帯は淡い黄色の花柄で、前に使った銀の帯紐をまた花のように結んでいる。雷臥たちに会った時と比べると、比べ物にならないほどの賑やかさだ。

普段はしない化粧も、むこうの世界の道具に興味を示した咲紀に有無を言わせぬ勢いで施された。

「あつ、アレを忘れるところでしたっ!」

満足そうに鏡を見ていた咲紀は突然思い出したように、箆笥の中

から一つの木箱を取り出してきた。あたし、そんなところにそんなものが入ってたなんて知らなかったんですけど。

咲紀は微笑みを浮かべながら蓋を開けた。木箱の中から出てきたのは、鮮やかな赤い石が目を引く髪飾り。

「へえー綺麗だね」

箱から取り出すと、髪飾りは陽の光を浴びてキラキラと輝く。

咲紀につけてもらった髪飾りは、銀細工の下がり動く度にしやらしやらと音を立てて少し気になるが、黒髪にもよく映えていた。馬子にも衣装か、などと思いつながら上から下までしげしげと観察していると、髪飾りで視線が止まる。

「ねえ、この髪飾り、綺麗だし気に入ってるんだけど……なんか他のと違うない？　こう、なんて言っているのかかわかんないけどさ」

それが何なのか、あたしには全くと言っていいほどわからなかった。でも、咲紀なら何かわかるはずだと思い尋ねてみると、少し考えてから納得したのか、答えてくれた。

「それはたぶん、石の色が赤だからですよ」

「赤だから？」

「はい。赤は炎帝が治める火の国の色……今では関係のない話です

けど、領地をめぐつて国同士争いが起こっていた頃は、他国の色を身に着ける事はあまりよく思われてなかったそうですから」

「異界にも戦争とかあったんだ……」

色の事なんかよりもそちらの方に興味がいく。おかげで違和感は然程感じなくなったが、せっかくのおめでたい日になんだか湿っぽい雰囲気になってしまった。咲紀もそれに気づいたのか、すぐさま話題を変える。

「ところで詩音さまはどうするんですか？」

「どうするって?」

あれ、この流れ前にもどこかであつた気がする。確かあれは……。

「詩音さまは雷臥さまのところへお嫁に行かないんですか？」

そうだ、あの時だ。あの東屋で、まるで友達を家に誘うように「オレのそこへ来るか?」って言うてたっけ。しかもたいそうな口説宣き文句までしてくれて、思い出しただけで疲れる。

ちらりと鏡越しに見えた咲紀は、やってしまったって顔をしていた。

「拓哉の事なら気にしないでいいよ。こっちに来た時からなんとなくそうなるだろうなって思ってたから。それにもう、住む世界が違
うしね」

言葉通りの違う世界。あんな鏡一枚が世界を繋いでいるなんて、
誰が信じる？ あたしは今でも時々、これは全部夢なんじゃないか
って思う。でもそれだと、奏音が掴んだ幸せも、あんなだけ両親
も、源藏さんの家族も、起きたらみんな失くなってしまふ。そう思
うと、覚めてほしくないって思う自分も少なからずいたりする。

「これは夢じゃないんだよね……？ あたしも、咲紀も、ちゃんと
起きてて毎日を過ごしてるんだよね？」

「詩音さま……」

今にも消えてしまいそうな、小さな声で名前を呼ばれて顔を上げ
ると、あたしなんかよりもずっと辛そうな顔で頷く咲紀が映った。

「あたし、ようやく決心がついた……、ここで生きていく……」

まだ右も左もわからない世界だけど、ここには家族がいる。いま
で通り姉がいて、不器用な両親がいて、大事にしてくれた叔父夫婦
がいて、頼りになる従姉もいる。

姫って柄じゃないけど、巫女って柄でもなかったし、あたしはあ
たしらしくこの世界で幸せになる。奏音が幸せになっただから、

双子のあたしが幸せになれないはずないし。

「だから咲紀、悪いんだけど、しばらく付き合ってね」

「どこまでも、いつまでも、ついて行きますよ。詩音さまは私の主であると同時に、可愛い従妹でもあるんですから」

振り返ると咲紀のライトブラウンの瞳と目があった。あたしたちはどちらからともなく口元に弧を描く。

結局湿っぽい話になってしまったけど、気分はここ最近で一番晴れやかになった。今なら明日良さんたちの事も素直にお父さん、お母さんって言える気がする。源藏さんとも会えば気まづくならないか心配だったけど、たぶん大丈夫。

あたしたちが住んでいる別邸と、主に公務などで使われる本邸とは長い一本の渡り廊下で繋がれていた。そこからでも見える本邸は壮大で、修学旅行で行った京都のお寺を思い出した。振り返って見た別邸ももちろん大きかったけど、本邸はそれ以上だ。

先を急ぎながら進んでいると、咲紀がさっきの質問の答えを尋ねてきた。

「ところで詩音さま、こちらで生きていく決心をつけたって事は、雷臥さまのところへお嫁に行くんですか？」

姫として生きるなら、国の為によその国へ嫁ぐのが当たり前なんだろうけど、生憎とあたしにはそんな気は微塵もなかった。

「それとこれとは話が別。あたしは好きでもない人と結婚するつもりは一切ありません」

「という事は……雷臥さまの頑張り次第では詩音さまもお嫁に行くんですね」

咲紀の思わぬ一言に足が止まってしまった。

あたしが、あの男を、好きになる……？ 頭に浮かんだのは、いつぞやの東屋で言われた言葉と赤い双眸。好きでもない女に嫁に來い、なんて言うような顔はいいけど中身最低な男にこのあたしが惚れる……。

「ありえないありえない、それだけは絶対ありえないっ！」

「詩音さま！ 立ち止まってる場合じゃないですよっ！！」

いつのまにか少し遠くに行ってしまった咲紀に注意され、止めていた足を動かす。今は一本道だからいいものの、この先で咲紀とはぐれたら完璧に迷子になる。誰かに助けてもらおうにも、誰が見方

で誰が敵なのかもわからないのだ。

それから少しして、ようやく本邸の中へと足を踏み入れた。相変わらずの木造建築平屋建てで特に変わったところはない。

「いいですか詩音さま。ここから先は地の国の要人はもちろん、我が国の要人並びにその親族、その他の国からも大勢来ています。大丈夫だとは思いますが、変な輩もいるかもしれませんから、絶対一人にはならないくださいね」

本人にその気はないってわかっているんだけどさ、こつも真剣に言われては逆に不安を煽ってるようにしか見えないんだよね。もしかしたら冷静に考えれるように、あえて不安を煽るような事を言っているのか？ まあ、どちらにしても絶対誰かしらコンタクトはしてくるだろう。

奏音の結婚だけを純粹に祝えないのは残念だが、今後のあたしの生活にも関わってくる事だ、めんどくさいなんて言ってらんない。

「ふうー……、行こっか」

しっかりと気を引き締めてから、あたしは一步踏み出した。欲に溺れる有象無象の集まりの中へと。

結婚当日 貳

社交界。それは華々しくも棘のある、艶やかな毒の花。甘い蜜を吸うために己を着飾った蝶と幾重にも糸を張り巡らさせた蜘蛛。

あたしは本当に、こんな世界でやっていけるのだろうか。早くも挫けそうだ。

「詩音、その着物もよく似合っているわね。さあ、早くこっちへ来て座りなさい」

広間の前までくると、音波さんが気付いて声をかけてくれた。隣には明日良さんがいて、そのすぐ近くに源藏さんと真咲さんもいる。小声で後ろから咲紀に促され広間に入ると、そこにいたすべての視線があたしにむいたのがわかった。穴が開くんじやないかってぐらい上から下まで全身を見られるのは、恥ずかしいを通り越して気持ちが悪い。

十メートルほどの距離をやつとの思いで歩き切った頃には、百メートル全力疾走した時と同じくらいに疲れていた。隣に座る音波さんが扇で顔を隠しながら、小声で話しかけてくる。

「みんな詩音を見てるわよ、特に、後ろの若いのはなんかはやけに熱い視線で……」

ほら、と目で示された場所に目を向けると広間の後ろの方でこつちを見つめる人たちと目があつた。途端に騒ぎ出す彼らに音波さんは「若いつていいわねえ」とやけにしみじみ口にする。

「あたしからしたらみんな同じくらい若く見えるんだけど」

平均寿命約千年のこの世界で、個人差はあれどみんな肉体的には老いる事はない。若いまま死ぬ。つまりこの世界でどう年齢を見分ければいいのか、あたしにはさっぱりわからないのだ。

あえて詳しく聞かなくなったけど、音波さんっていったいいくつなんだろうか。実はもう人生の折り返しに達していたりして。

シミひとつない音波さんに顔を見ていたら、意味する事がわかったのか額に青筋が浮かんた。形のいい唇には弧が描かれる。

「そういえば昔、どこかの阿呆が私に歳を聞いてきてね、女性に年齢を聞くものではないと九分殺しまで追い込んだことがあつたわ」

「さ、さいですか……」

九分つて何？ それってもう虫の息だね。ていうかよりにもよつて、よく音波さんに聞けるよね。あたしにはムリ、目で訴えるのが精いっぱい。

その誰とも知れぬチャレンジャーに一種の尊敬にも近い感情を抱いていると、見覚えのある顔が広間に入ってきた。

「噂をしたら影、ね」

ぼつりと音波さんが零した言葉にあたしは「ああ」と声に出して納得してしまった。この男なら大いにあり得る。

男、雷臥は明日良さんやむこうの国の人に立つたまま軽く礼をすると、一番手前に腰を下した。その時に雷臥はあたしを見て一瞬驚いたような顔をしたが、すぐに何事もなかったように隣の男の人と話し始めてしまった。

「何あれ感じ悪っ。ツー!!!」

つい思った事をそのまま顔と口に出すと、太ももを扇でぴしゃりと叩かれた。これがまた地味に痛いなのって……。恨みがましく隣を見れば、口元に扇を持ってきて素知らぬ顔をしている。憎たらしいといったらありやしない。

視線を前に戻すと、雷臥の隣に座る、短く整えられた金髪に、アメジストのような紫の瞳をした男の人と目があつた。綺麗な目だなあ、なんて思つてじつと見つめていると、にやりと笑われた。その顔はどこかで見た事あるような記憶がある。

既に逸らされた目を考えていると、真紀さんともう一人男の人が入ってきた。二人が入ってきた事を知ると、広間はだんだんと静かになっていき、ついに物音一つしなくなった。

静まり返った広間にポロンと、琴の音が鳴り響く。するとそれを皮切りに次々といろんな楽器が加わり、一つの曲を奏でる。聞くものを包み込むような、優しい曲。

「これは地の国の曲……母なる大地の曲よ」

音波さんが言い終わると同時に、白い羽織に黒の縞模様の袴を穿いた大地さんがゆったりとした足取りで現れた。もっとじやらじやらしたゴテゴテの服を着るものだと思っていたあたしは、むこうでよく目にする姿に若干拍子抜けしてしまう。しかしそれが間違いだったと気付いたのは、大地さんがすぐ目の前を通り過ぎた時だった。白い羽織には近くで見なければわからないような白い糸を使って、竹林に身を潜め、今にも飛び出してくそうな虎が刺繍されていた。長着も袴も普段では滅多にお目にかかれないような上質なものと、あたしでもわかった。着物はピンきりとは、よく言ったものだと変に納得してしまう。

曲は琴の独奏でしめを飾った。次に音を奏でたのは笛。いつ切れもおかしくない一本の糸のようだった笛の音は、他の笛と合わさって力強い音へと変わる。そうして徐々に徐々に他の楽器も合わさって、一本の糸は壮大で幻想的な世界へと姿を変えた。

「この曲……」

「そう、これが原初の国の曲……創造と最盛の曲よ。この曲には詩もあつてね、あんたたちがお腹の中にいる時、よく歌ってたのよ」

子供はお母さんのお腹の中にいる時の事を思い出せないだけで覚えていたのだと、前にテレビで見た事があつた。その時はそんな事があるわけないと奏音と話していたが、どうやら本当なのかも知れない。

曲が一番の盛り上がりを見せた時、広間がざつと揺れた。真っ白

な花嫁衣装を身に纏った奏音が姿を見せたのだ。その衣は二百年たった今でも美しさを失わず、見る者を魅了する。

奏音は大勢の人たちの前を通り過ぎ、あたしたちを通り過ぎて、大地さんの隣に立った。頬を赤く染めて微笑む新婦と、それを優しく見つめる新郎。絵に描いたような美男美女は手を取りあって腰を下した。

そこからは盃を交わしたり明日良さんや大地さん本人とその親族の口上をしたりとごく普通の結婚式が行われた。このまま式は何事もなく静かに終わるのだろうと思った矢先、今まで黙ってお淑やかな女性を演じていた音波さんがすっと立ち上がる。

「さあさ、堅苦しいのはここまでよ。ここからは無礼講で行きましよう？ 真咲っ！ お酒を持ってきて、今日は飲むわよー！！」

「うおー！！！！」

音波さんの一言で、場の空気は大きく変わった。すべての襖が取り払われると、ただでさえ広かった広間はさらに広くなり、まさに大広間と言える。今までどこにいたんだと、不思議に思うくらいいたぶん侍女さんたちが大広間のあちこちに宴会用だと思われる大きな膳とお酒を次々と並べていく。

啞然とその光景を見ていると、奏音が大地さんと連れ立ってこちらに來た。近くで見ると、なんと神々しいことか……。

「おめでとっ」

顔を見合わせて微笑む二人。幸せなのがひしひしと伝わってくる。

「ありがとう。それにしても今日の詩音、すっごい綺麗だよ。わたし思わず目を疑っちゃったもん！」

それはつまり普段はたいした事ないって事なんだろうか……いやいや、奏音に限ってそんな事思はずないか。ただ、現在大広間の視線の大半は奏音に向けられているのを、ご存じなのだろうか。かわいく「詩音モテモテだね」なんて、言っても許されないよ？

「あ、ありがとう。奏音もすごい綺麗だよ」

「わたしが綺麗に見えるのは、真紀のお化粧の腕と、お母さんの着た花嫁衣装がとっても素敵だからだよ」

謙遜する奏音のなんと奥ゆかしい事か。音波さんも真紀さんも、後ろで袖を濡らしてるよ。でもそこが奏音のいいところもあり、悪いところもあるとあたしは思っけどね。

その後は少し話すと、来賓への挨拶があるからと二人は共に去って行った。

「奏音、幸せそうだね」

「そうですね。はあ、わたしにもいつか奏音さまと大地さまのような運命的な出会いはあるんでしょうか……」

咲紀はうつとりと虚空を見上げると、すぐに肩を落としてしまった。現実には甘くないと我に返ったのだろう。あたしはそんな咲紀に苦笑いを浮かべる事しかできなかった。それに気づいた咲紀は頬を膨らませて、なにやらぶつぶつと唸っている。

めんどくさいので咲紀はそのまま放置し、辺りを見回す。政治の話をするもの、お酒や膳を楽しむもの様々だが、その中でも一番人目を引く集団がいた。

「ちょっと咲紀。あの、雷臥の周りにいる人たちは？」

「んー……ああ。あの方たちは帝ですよ」

「帝……」

「はい。左から順に、炎帝の雷臥さま、風帝ふうていの小春さま、光帝こうていの春か日すがさま、そして雷臥様の父である雷帝の雷轟らいこうさまです」

どうりで他の人たちとは違う近寄りがたい雰囲気だと思った。そのくせ周りはみんな話しかけようと躍起になっている。あれは帝に近づきたい輩を牽制するためにわざと一つに集まってるってわけか。ん？ 雷臥のお父さんが雷帝ってちょっとおかしくない？

「ねえねえ、雷臥って先代の炎帝の子じゃないの？」

「詩音さまはご存じなかったんですね。雷臥さまは先代炎帝の妹君

である蓮火^{れんひ}さまと雷轟^{らいこう}さまとの間に生まれた子で、先代をも唸らせるほどの火の力の持ち主だったんです」

「ふーん。それで先代の炎帝が雷臥を指名したんだ」

実力がものを言う世界らしいのでそういう事もあるのだろうと納得していると、咲紀は言いくそうに「それが、そうじゃないんですよ」と声を潜めて言う。どういう事なのか気になって、詳しく聞こうと体の向きを変えたところで後ろから声をかけられた。

「ちょっといいかな」

「あ、はい。なんでしょうか？」

つい巫女をしていた時の受け答えをしてしまい、恥ずかしく思いつつも振り返ると、そこには件の雷帝が立っていた。タイミング良すぎでしょ……。

雷帝は「失礼する」と一言述べてからその場に腰を下した。あたしも居住まいを直して、正面から向き合う。

「あの、何か？」

いつまでたっても何も言わない雷帝に若干イラついたのは許してもらいたい。息子のお見合い相手が気になるのはわかるし、あたしみたいなのが相手に目を疑うのも無理はないと思うが、いくらなん

でも口を開けたまま上から下まで見ないでいただきたい。

笑顔が引きつらないように注意しながら尋ねると、はっとした雷帝は豪快に笑って見せた。

「じろじろ見てすまなかったな。気を悪くしたなら謝る。すまん」

「あ、いえ、頭を下げてもらうほどの事ではないですから」

一頻り笑って気が済んだのか、雷帝は特に気にした風もなく頭を下げた。帝という身分の方が、いくら息子のお見合い相手だとしても、こんな小娘に頭を下げるものなのかと驚いてしまう。それに雷臥とは目元の雰囲気とか以外、似ても似つかない。

だからつい、余計な事を口走ってしまった。

「あの……本当に雷臥、様のお父様、なんですか？」

「詩音さまっ!？」

後ろで咲紀が慌てる声がしたけど、言ってしまったものは仕方ないし、あたしにはどうしてもこの親からあの子が生まれるとは思えないのだ。

雷帝は一瞬呆氣にとられたような顔を見ると、実に楽しそうにお酒を呷った。

「どうしてそう思う」

「……お父様にこんな事を言うのは失礼かもしれませんが、雷臥様が今の雷帝の立場なら、頭を下げる事はなかったでしょう。それに、彼なら厭味の一つもつけそうですから」

絶対あいつなら鼻で笑った後に「馬子にも衣装か」とかほざくに決まってる。

雷帝もその様子が想像できるのか、苦笑した。うるさく言っていた咲紀でさえも後ろで笑うのを堪えている。

「素直な娘だ……ますます気に入った。これはぜひとも嫁に来て、あの馬鹿を躰ほしいものだ」

息子の事を悪く言われたのにまったく気にしたそぶりも見せない雷帝には少し驚いたが、それをぜひ嫁にとは。しかも躰……。息子ともども何を考えているのかわからない。

曖昧な返事と愛想笑いで誤魔化していると、雷帝は急に真面目な顔をして語り出した。

「あいつの母親、儂の妻はあいつを産んですぐに病で死んでしまった。雷臥の事は侍女や従者、雷臥の兄姉にまかせっきりだった……」

甘やかされて育った結果がアレなのか。あたしが一人で納得していると、雷帝はがくつと頭を落とし項垂れた。

「昔は何にでも興味を示し、明るく元気で素直な子だったんだが……。一人前の男に育て上げると息巻いた、特に儂の娘がそれはもうしごきまわしてな。四六時中引つ張りまわされ、幼少時代は怪我が絶える事はなかったほどだ」

「そ、そうなんですか」

まさかの事実にあたしは内心でかなり驚いていた。てつきり甘やかされて育った末っ子だと思っていたのに、実はその正反対だったなんて。そんな毎日怪我するほどスパルタされたら誰だってぐれるわ。

まあ、素直な雷臥なんて想像つかないどころか気持ち悪いとすら思うけど。

苦笑いを浮かべて雷帝の話しに耳を傾けていると、さっきまで沈んでいたのが嘘のように勢いよく顔を上げ、あたしの両手をとった。

「だから頼む！！ あいつの捻じ曲がった根性を叩きなおして、傍で支えてやってくれ！」

歴代最強とか謳われる男を、妖怪歴たった二ヶ月のか弱いこのあたしが、叩きなおす……？ しかも傍で支えてって、妻としてって事でしょ？

「あたしにはムリです、絶対ムリっ！」

しばらく両者一步も引かない睨み合いが続いていると、天の助けとばかりにどこかの重役だと思われる男が雷帝に話しかけた。社交辞令から始まる会話は今にもこちらに飛び火してきそうなので、ここは逃げるが勝ちだ。

「今日は姉の婚儀にわざわざお越しいただいてありがとうございます。お邪魔になるといけないので、私はここで失礼します」

相手に有無を言わせないために一口で済ますと、礼をして素早くその場を後にする。途中悔しそうな雷帝と目があったが、愛想笑いで誤魔化した。だてに何年も巫女さんやってないっての。

これからどうしようかと、広間を見回す。明日良さんは帝らしく次から次へと話しかけられていて忙しそう。音波さんは酒飲み集団の筆頭として盃を傾けている。奏音は相変わらず大地さんと一緒に挨拶回り。他の人は全然知らないし、じろじろ見られて感じも悪い。とりあえず広間の端に咲紀と二人で移動した。

何をするにも人の視線が付きまとうて落ち着かない。動物園の檻の中にいる動物たちって実は大物なのかもしれないなんて自分でもバカな事を考えていると、誰かが近づいて来た。

「これは二の姫様、このようなところで何をなさっておいでですか？」

話しかけてきたのは、この世界で初めて見る肥満体系の男の人だ

った。その隣には爽やかな笑顔を浮かべるなかなかのイケメンが立っている。共通するところと言えば、二人ともやたら派手な着物をお召な事が。

彼らはそれが当たり前のようにあたしの前に腰を下した。

「いやー音波様のご息女だけあって実にお美しい、まさに噂通りの美姫ですな。これは帝が表に出さないのも頷けるが、その美しさの前では誰もが皆尻込みして近寄れないでしょうに」

そう思うなら近づかないでほしいと願うあたしを無視して、男は延々と一人で喋り続ける。となりのイケメンもずっと笑顔で人の顔をじろじろと見つめている。……ここまで笑顔だといつそ胡散臭い。彼らの狙いはなんなのか、大方想像はついてはいたが無下にできるはずもなく、当たり障りのないように相槌を打つ。いい加減その繰り返しに飽き飽きしてきたところでようやく男は核心に触れた。

「姉様様が嫁がれてはお寂しいでしょう」

「はい。でも、姉の幸せは私の幸せでもありますから」

「何、無理する事はありません。ここにいる者はみな家族同然なのですから……そうだ、何かありましたらこの者をお呼びください。この者はまだ百半ばを過ぎたところ、きつと詩音様のお力になりましょう」

イケメンは頭を下げ「私のような者でよろしければ——」とかな

んとか言って白い歯を覗かせた。これは自分の容姿を理解した上での笑みなんだろうが、うちの親戚はなぜか美形ばかり。この二月で美形に対する免疫が急上昇したあたしには特に効果はなかった。しいて言うならこのくらいのイケメンの方が飽きないんだろうな、ぐらいだ。

しかしどうしたものか。ここで下手に愛想笑いを浮かべていると勘違いされそうだし、かといって無下に切り捨てるわけにもいかなしい。あたしが返答に詰まっていると、横から聞き覚えのある声がかかった。

「おい、詩音。二人きりで話があるんだが、ちょっといいか？」

声のした方に目を向けると、そこには赤い長着に黒袴の雷臥が腕を組んで立っていた。やけに二人きりを強調する雷臥に、目の前の二人は動揺を隠せない。さらに遠くで黙って様子を見ていた人たちも同じく小声で何かを話し合っている。ていうかこいつらずっと観察してたんだ……。

ここで領いても面倒な事になりそうだが、せっかく助けてくれたのだ。ここで断れば女が廃るってもんだろ。

「そういう事ですので、私は失礼しますね。咲紀、お詫びにこの方たちにお酒を出してもらえる？」

「かしこまりました」

これでアフターフォローもばっちり。

あたしはさつと立ち上がると、その場で待っていてくれた雷臥と一緒に広間を後にした。後ろでなにやらざわざわとうるさくなったのは、できれば気のせいだと思いたい。

結婚当日 参

雷臥に連れて来られたのは、大広間から程よく離れた日当たりのいい縁側だった。そこからは庭に咲く牡丹のような濃いピンクの花が見える。

雷臥はそこにおっさんのように寝そべると、大きな欠伸を一つ。これが本当に一国の主というのだから驚きだ。そういえば咲紀も雷臥の即位について何か言いかけていた……。

「何突っ立ってんだ。さっさとこっち来い」

「え？ あ、うん」

日の当たる場所に腰を下すと満足したのか、ふんと鼻を鳴らしてまた肘枕で寝る態勢に入ってしまった。

何かをするわけでも、言葉を交わすわけでもない、沈黙の時間。それでも辛いと思わないのは、今まで窮屈な場所にいたせいだからなのか。風が吹いては揺れる草木を遠目に眺めながら、日向ぼっこをするのも悪くはないのかもしれない。

「なあ、その髪飾り……」

かなり長くなってしまった髪を風が悪戯に撫でるものだから、手櫛でまとめているとこっちを見ないまま雷臥が話しかけてきた。

そういえば赤は火の国の色、だったっけ。もしかしたら雷臥のお母さんも赤を身に付けていたのかもしれない。

「何、似合っていないとでも言いたいわけ？」

「……よくわかってんじゃねえか」

鼻で笑った雷臥は、「お前には赤は似合わねえ」と変に真面目な口調で呟いた。

なんだかいつもと少し様子が違う……？　ちよつとした違和感を感じたあたしは、怒る事もせずに何色なら似合うのかと問いかけた。あたしに似合う色を考えているのか、それとも全然違う事を考えているのか。しばらく黙ったままの雷臥に、再度同じ質問をしようとしたところで何かが近づいてくる足音が聞こえた。

「ギン、こつちだ」

「ギン？」

名前を呼ぶと廊下を進む音が一段と早くなって、廊下の角から姿を現した。あたしたちの姿を視認するとスピードは増々上がり、電光石火の如く勢いで雷臥に向かって走ってくる。

あ、死んだなこれは。

「馬鹿っ。はえうぐっ！！」

凄まじい勢いで突撃された雷臥はそのまま縁側から庭に向かって吹っ飛ばされ、無様にも地面を転がって行く。

「ガウ！」

さっきまで雷臥がいた場所には、拾った時よりも一回りは大きくなった神獣がお座りをして、何が起こったのかわからないといった風に小首を傾げる姿があった。

なんて罪作りな奴……。悪気がないだけに性質が悪いわ。

「何しやがる、この駄虎っ！！」

勢いよく立ち上がって、ギンに向かって文句を言う砂だらけの男は情けないとしか言いようがない。それどころかあたしよりも幼く見えてしまうのは何故だろう。

遊んでくれるとも思ったのか、ギンはぴょんと庭に飛び降りると一目散に雷臥の傍へと駆け寄る。もしギンが犬だったら、今頃尻尾は忙しく振られていただろう。

「ガウガウ」

「ガウガウじゃねえよ！　っておい、袴を噛むなっ」

言葉ではそう言いつつも、満更でもなさそうな雷臥。本人が意識しているのかはわからないが、そこにはいつもの人を馬鹿にしたような笑顔はなかった。

むこうでも、こっちでも、根本的なものはたいして変わってないのかもしれない。

それにしても、あの俺様な雷臥がギンとじゃれ合っている姿はかなり面白い。言うほどひん曲がった性格はしていないみたいだ。

「ギン！ もつとやつちやえ」

「てめ、詩音っ！ 他人事だと思って、うおっ！？」

返事がわりなのか、ギンは雷臥に向かって勢いよく飛び掛かった。注意をそらした雷臥はまんまと引っかかって、再び地に伏せる。

その時少しだけ弾んだのは、尻もちついた雷臥が面白かったからなのか。

「おらっ！ 捕まえたぞ」

「ガルルル」

「おっ？ 一丁前に唸ってやがる」

空に向かって高く上げられたギンを地面に寝転がったまま見上げる雷臥は、帝でもなんでもないただの人だった。

このままでは馬鹿な事を考えてしまいそうで、あたしは足袋を脱ぎ捨てると、ギンを救出に駆け出した。

裸足で外を歩くなんて小学生以来で、走りにくい着物の裾を軽く持ち上げると、なんだか心まで軽くなった気がする。

「とつた！」

「は！？」

上から抱え込むようにしてギンを奪うと、あたしはそのまま雷臥を抱いて庭を走った。土を、草を踏みしめる感触にくすぐったさたちよつとした痛みを感じながら、腕の中の温もりと共に。

後ろから聞こえる、焦燥を含んだ声に満足している自分を、頬をなでる風で振り払うかのように。

結婚当日 肆

太陽が傾いて長い影を作り始めた頃。屋敷全体に響き渡るような鐘の音を、あたしは小さな蔵の中で聞いていた。乱雑に置かれた物には薄く埃が積もっていて、居心地がいいとは言えない。

今の鐘の音は、奏音が屋敷を出ることを知らせる合図。帝の婚礼はこうして国民に知らせ、祝われながら町を出るのが習わしらしい。国民も大いに祝い、町はその日朝からお祭り騒ぎになるのだと聞いた。

「キュウーソウー……」

隣で寄り添うように寝そべっていたギンは伏せていた頭を上げ、紫色の双眸であたしの顔をじっとみつめてくる。行かなくていいの？ そんな風に訴えかけてくるような目に居たたまず、乱暴に頭を撫でまわした。ちよつと強くし過ぎたらしく、ギンは逃げるようにその場から離れ、こちらを威嚇する。

さつきまで暖かかったのに、急に冷えていく体と心。人はどうして、失ってからじゃないと気付かないのだろうか。

寒さを堪えるように、体を小さくして目を閉じた。元から暗かった視界は何も映さなくなつて、まるであたし一人だけが取り残されたような錯覚に陥つた。

「おい」

思考の淵でかけられた、若干低い声に顔を上げると、不機嫌そうに顔を歪めているらしい雷臥が立っていた。

彼はその場で腕を組んでいるだけで、何かを言う気配もない。

「……なに？」

たまらず応えたあたしに、雷臥はさらに不機嫌そうな声で返してきた。

「なに、じゃねえよ。お前、見送りしねえつもりか」

形だけの疑問の言葉に、わかつているならわざわざ聞くなと胸の中で毒づきそうになるが、それでも思考の淵から救ってくれたことには感謝しているので何も言わなかった。

ふと何かに引つ張られる感じに視線を下げれば、いつの間にかギンが足元に戻って来ていて、控えめに着物の袖を口にくわえて引つ張っている。上目遣いでこちらを見る仕草は、本当に愛らしい。早く行こうと言っているのだろうか。

赤と紫。二つの色に見つめられても、あたしの身体は一向にこの場を動かうとしなかった。

そんな態度が雷臥は気に喰わなかったのだろう。すぐ傍にあった木箱を力任せに蹴りつける。

「このまま何も言わず行かせて、姉貴が本当に幸せになれると、お

前はそう思ってたのかっ」

驚きに飛び跳ねたギンを落ち着かせるように、そっと背を撫でてやると、耳をピンと立てたまま小さく唸って何かを訴える。

そんなこと、雷臥に言われなくなつて本当はわかつてるんだ。きつと奏音は屋敷を出た後、何度も後ろを振り返る。振り返つては自問を重ね、自分を責めるだろう。それにああ見えて頑固だから、馬鹿なことをしでかすかもしれない。

「このまま行かせて、お前自身は後悔しないのかっ」

たぶん、あたしは後悔するだろうな……。

お互いに心にしこりを残したまま、離れ離れになるなんて。次に会う時、あたしはあわせる顔がないし、奏音も後ろめたい思いを抱くかもしれない。

でも……。

「そんなこと、あんたに言われなくなつて全部わかつてるよっ！でも身体がいうことを利かないの、心がうんって言わないの——っく、ううっ」

続く言葉は嗚咽で口にすることはできなかった。人前で涙する自分が情けなくて、既に赤く腫れた目元を乱暴に拭くと、腕に顔を埋めた。

奏音には幸せになつて欲しいと心から思う。でもそれと同じだけ

寂しいし、一人でやっていけるかどうか不安なのだ。いつも隣にあった温もりがなくなつて、心が、体が悲鳴をあげる。決して長くはないが今まで培ってきたものがなんの意味もなさない世界で、敵味方の区別もつかず、まるで囲われるようにして生きていく。それがどれだけ心細いのか、たとえ普通とは違う人生を歩んでいる雷臥でもわからないだろう。

彼に当たるのはお門違いだが、そうでもしないとどんどん深みにはまって行くような気がした。

「なによ、なんとかつ、言いなさいよっ!!」

黙ったままの雷臥に向かつて、手近にあつたものを手当たり次第に投げた。それがなんだつたのかなんて確認する余裕はなかった。彼が避けなかったところを見るとたいして危険なものではなかったのだろう。しかし、今度は何故避けないのかと、苛立ちがつのる。ギンはとつくに雷臥の後ろに隠れたというのに。

少し乱れた息と心を落ち着かせるように深く息を吐き出したところで、雷臥はようやく口を開いた。

「気はすんだか」

怒りでも、侮蔑でもない、背筋をぞつとさせるような声音に顔を上げると、焼けるような赤い瞳と目があった。それはこの髪飾りについた石とよく似た色で、一見すれば激しそうな色なのに不思議と心を落ち着かせる。

なんだか自分がちつぽけに思えて小さく頷くと「そうか」とだけ

答えた雷臥はゆっくりとした足取りであたしの前に立った。そして徐に右手を上げる。

仮にも帝に物を投げつけるなど少々行き過ぎた行為をした自覚はあった。打たれるのかと身を固くし、どうせ見えないならと目もとじる。しかしいくら待っても予想していたような衝撃はこない。

不審に思った頃、チャリと何か金属が擦れる音がした。

「やっぱお前にこれは似合わねえ」

すつと髪から抜ける感覚に目を開けると、案の定目の前でゆらゆらと揺れる髪飾りがあった。最初につけていた場所とは全然違う場所に留まっていたのは、たぶん暴れたからだだろう。

受け取ろうと手を差し出すと、雷臥は腕を引きギュツと固く握りしめぱつと開く。何をしているのだろうかと思うよりも早く、髪飾りは一瞬のうちに炎に飲まれ、跡形もなく燃え尽きた。そのあまりの自然すぎる一連の動作に口を挟むこともできず、雷臥の唐突過ぎる行動に文句を言うどころか、言葉が出ない。

何故かやけにすつきりした顔の雷臥はあたしの手を掴むと、有無を言わせぬ勢いで強引にそのまま蔵から出てしまう。

蔵の外では夕日が赤々と存在を主張していて、地面に映った影はかなり大きくなっている。

さすがに奏音も、もう屋敷を後にしたのだろうか……。

初めて見る屋敷の正門は大きく、たくさんの人がその場にいたが全く窮屈さを感じさせなかった。門の左右には武器を携えた男の人も立っている。

雷臥に手を引かれる形で現れたあたしを目にした彼らは、途端にざわめきを増す。漏れ聞こえてきた会話はあたしたちの関係を気にしているものが多かった。

「詩音さまーっ！」

名前を呼ばれそちらに視線をやると、咲紀が大きく手を振りながらこちらに向かつて走って走ってくるころだった。

咲紀はあたしたちの前に来ると軽く頭を下げ、奏音たちがすでに出発したことを知らせてくれる。

「今ならまだ間に合います。詩音さま、悔いを残してはダメですよ」

「咲紀……」

一度小さく微笑んだ咲紀は顔を引き締めなおすと、雷臥に向かって頭を下げた。

「雷臥さま、詩音さまをお願いします」

いつにも増して侍女らしく見えた咲紀は、顔を上げると今度は従姉のお姉ちゃんになっていた。あたしの肩に手を置いて、行つてらっしゃいと背を押してくれる。

今まで黙っていた雷臥は、もう一度あたしの手を掴むと無言で歩き始めた。

本当は誰よりも奏音に会いたい。会ってしつかり別れを告げて、祝福したい。そんな気持ちを隠すよう、あたしは雷臥に半ば無理矢理引かれ、仕方なしに歩く風を装った。

「強情な奴」

途中鼻で笑う声が聞こえて、たまらなく羞恥に駆られた。それこそ顔だけでなく全身が真っ赤になったんじゃないかって思うほどにくつくつと喉で笑いを噛み殺す目の前の男を後ろから殴ればどれだけ気持ちがいいだろうか。そんなことを考えているうちに、あたしは初めてこの屋敷の外へと踏み出していた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9659t/>

炎帝の氷姫

2011年11月18日05時28分発行